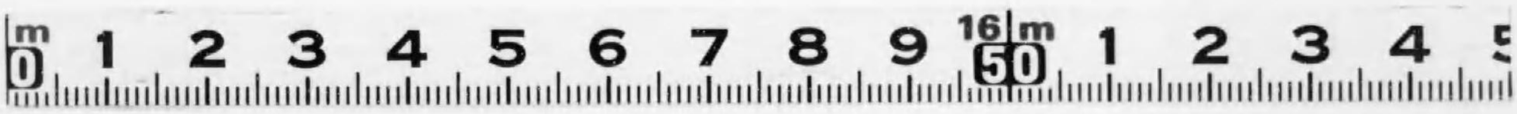
設



505-46

フィーバッヒル氏
著一系集全

最後の一線

大正
11. 6. 8
内交
東京

叢文社藝術
一八二一

アルツィバーシェフ全集刊行の辭

アルツィバーシェフは芳烈なる肉の描寫を以つて聞えた、現代ロシヤ文學の偉大なる作家である。而もその肉の描寫たるや、かのフランスのモーパッサンが、主として繪畫的であり、平面的であるに反し、立體的であり、造形美術的（プラスティック）であり、音樂的であり、更に、より遙かに感覺的である。

前者が主として、眼に訴へた物を美しく精寫したるに反し、後者は「脈打つ心臟」を以て、心眼に映じたるもの、體驗したるものを再現しようとしたのである。眼、耳、鼻、舌、皮膚――全身の器管全部から、強くも吸收せられた物の、深く鋭き記錄である。

彼は性的欲望、性的衝動の天眞爛漫な開花を、人間生活の基調であると考へた。そこで彼は、血と若さと、暖かい濕りと、搖れ動く靜けさとの抱き合ひ絡み合つた蠱惑の世界へ、勇み進んで突入した。而してその世界に於て獲得したる豐富な所得を、讀者の前に展開して見せた、荊棘の路なるこの人生の唯一の杖であり柱であるといふ强い信念を以て。玆にこそ、彼が性慾描寫家としての、他には類比を見ざる特色が存するのである。

然し、彼は決して性慾描寫を以て終始した作家ではない。彼の心には、黑い冷たい陰影が生れて來た。生そのものに對する、息窒るやうな懷疑の陰影である。懊惱、焦燥の、傷ましい藝術的生活を造つた後で、「最後の一線」を見出した彼が境地は、暗黑な否定の世界であつた。恐ろしい絶望の深淵であつた。極端な肉と

變轉する人生の謳歌は、やがて闇黑と絶望との呪文となつた、この二つこそ、今日迄の彼が全作品を縱斷して狂奔する流である。

「われに絶對なるものを與へよ、然らざれば死を！」彼もまた、この人生の賽轉臺に、乘るか反かの一六勝負を演ぜずには居らない、偉大なる人生の賭博者であつた。凡人の到底踏み出し得ない「最後の一線」を踏み越えずはゐられない人であつた。片時と雖も絶對を求めずには居られない彼の魂、あくまでも塀外の境地を探求せずには居られない彼の精神――われ〳〵が彼から受ける最高最大の滋味はこの魂から放散するの芳烈な香氣である。

徒らに虛飾的言辭を弄しつゝ、人の皮相を堀りかへす他に、何等爲すところを知らざるに似たる現代文壇及び思想界に、この全集の出版がいかに大なる刺戟を

齎らすかはわれ〳〵の堅く信じて疑はざるところである。この全集を讀破せられたならば、讀者諸氏の人生觀はたちどころに一變せずには居ないであらう。われ〳〵はかゝる抱負と希望とを以てこの全集の刊行に力を注ぐものである。

一九二二年五月

編輯者誌

アルツィバーシェフの位地

片上伸

一

ロシヤ文學が世界的に認められるやうになつたのは、トルストイ、ドストイエーフスキー、ツルゲーニェフなどの輩出した十九世紀の後半期からであるこれ等の三大家の名は、ロシヤ文學に就いて何人も先づ必ず想ひ浮べるものである。これ等の名がロシヤ文學を世界的にするほどの强烈な光を放つてゐるとともに、これ

等の名の後に來るものは、自己の道を拓くために何等かの點でこれ等の三大家の所有しなかつたものに志すべきであつた。十九世記末から二十世紀へかけてのロシヤ文學は、期せずして二つの道に向つた。一つは人生の多面的表現であり、今一つは新樣式の創造新技巧の洗煉であつた。人生には、上記の三大家の視野に落ちて來なかつたところの、もしくはそれ等の人々によつて特に情細深刻な觀察を加へられなかつたところの、要するに未だ藝術の上に表現せられない方面の事實乃至題材が甚だ少なくない。また表現の技巧に於いても清新鋭敏な神經と感覺とによつて一層總合的な新形式新技巧を創造すべき餘地がある。技巧と題材との二方面に於ける新開拓が、相錯綜して十九世紀末から二十世紀へかけてのロシヤ文學を生み出したといへる。人生の未だ觀察せられざりし事實、もしくは特殊の大

膽深刻な觀察を加へられざりし事實、この方面に於いて新天地を開かうとするものは、專ら現實主義的傾向を有する作者である。現實に向けられた新らしき眼がおのづからその方面で新領域を見出だすわけだからである。彼等の多くはリヤリストである。而かも、その現實に對する新人の新觀察が、現實の表から、更に廣く、普遍的に、運命的に奥深く透徹して測りきはめがたい人間の魂の世界に邁往するに至つて、リヤリズムは更にシムボリズム乃至神祕主義的惡魔主義的リヤリズムとなつて來る。觀察の態度その題材の範圍が現實の表に忠實である間は、その表現の技巧も忠實な明確なリヤリズムであるが、人間の魂の世界、運命の世界神祕主義的惡魔主義的現實の世界に往くに至つて、表現の技巧もまた自のづから明確なリヤリズムとは異なつて來る。

二

現實の生活に特殊の觀察を加へた作者の中には、マクシム・ゴーリキーがあり、アレクセイ・トルストイがあり、クープリンがある。ゴーリキーの描いたのは自由な漂浪者生活である、人生の「どん底」である、責任、束縛、一切の文明の欺きの手の屆かない自由人の生活である、大膽な、皮肉な、傲然たる、縲縷の超人の生活である。アレクセイ・トルストイの描いたのは、亡び行く貴族階級である。新たに勃興して來た資本主義的經濟組織の下にあつて、どの方面からも舊來の勢威を維持して行けなくなつた貴族階級の悲喜劇である。クープリンの描いたのは放縱な軍人生活である。曲馬師團の生活である、魔窟の生活である。これ等の作者の

間には、その表現の技巧の上に勿論それ〳〵特色があつて、一樣には言ひがたいが、しかも忠實なリヤリストであることに於いては何れも一つである。現實の觀察にそれ〳〵の新局面を見出だしたことに於いては何れも一つである。

現實の表に新局面を見出したものの中には、單にロシヤ生活に特殊な事實としてでなく、人間生活の一般に共通な普遍的意義を有する特殊の題材を捉へて來たものがある。而してそれは自のづから問題的の意味を有つ。人間惡の問題、魂の神祕、運命の問題、死の問題、性の問題、これ等はその最も重大なものである。人間惡の問題を取り扱つたものはソログーブであり、魂の神祕、運命の問題を取り扱つたものはアンドリエーフである。而して死及び性の問題を一種のいたましく惱ましき大膽さを以て取り扱つたものがアルツィバーシェフである。

三

千九百五六年の、日露戰爭後の革命を中心として、要するに革命的傾向とその反動との交錯が、二十世紀の初めから最近に至るまでのロシヤ文學の背景を成してゐたことは事實である。經濟事情の變動に伴ふ農民の不安動搖、農家の青年都會への集中、農民一般の智力的覺醒の萠芽、工業都市の發達、勞働者の運動、都會に於ける小市井人の生活、土地財產を所有せず、社會上何等の特權を所有しない敎育ある中流生活者の子弟の生活、――すべてこれ等は多少とも何等かの意味に於いてこの時代に於ける革命的氣勢と相關係するところの事實であつた。都會生活を中心として、そのうちに文學の題材を求めること、少くとも都會生活の影

響、新經濟生活の影響を示す意味に於いて地方田園の生活を題材とするといふのが、この時代のロシヤ文學に見られる著しき現象の一つである。郡會人乃至知識階級もしくはそれ等と交渉ある周圍の生活が、二十世紀文學の主題となるに至つたのは、その一面に革命運動がいかに暗默のうちにひろく社會の興味を裏づけて置たかを語るものである。

千九百五六年の革命は失敗に終つた。この革命運動の後に來た反動の機運のうちには多くの重大な意義を見ることが出來る。革命運動の精神は、一切の既定の價値を顚倒せしめるところにあつた。一切の人生の根本問題について、全く新たなる立ち場から大膽自由な批判を下さうとする精神であつた。少くとも革命運動はこの種の氣分心持ちを一般に漲りわたらしめたといつてよい。殊に事實となつ

て眼前に迫つて來た革命に對して、知識階級はその實際上の立ち場を決定せなければならなかつた。革命に參加するものもまたこれに參加せざるものも、これを自己の切實な問題として、何等かの自己是認の根據を見出さねばならなかつた。革命の意義は如何、革命の犠牲の意義は何であるか、理想といひ、未來の新社會生活のためといふものと、自己の、再び繰り返さるまじき生命との關係は如何。これ等の疑問は、人をして自のづから人生そのものの價値乃至主義に就いて、宗教に就いて、自己の個性と他との關係交渉に就いて、根本的の、實際的の解決を求めしめるに至つたのである。而してその一つは神を求める一派の宗教的傾向となり、宗教に基く宗教のための革命の是認となり、その一つは革命を否定する、寧ろそれに冷淡無頓着な個人主義的傾向となつた。革命が人々の豫期したやうな

結果を招き來らなかつたといふことも、革命に於いて知識階級が必ずしも支配的決定的の役目を演じなかつたといふ事實も、たしかに革命に對し、社會的協同的の興味に對して反かしめるに至つた事情の重大なものであらう。

四

革命に對する冷淡、個人主義的思想傾向、强烈なエゴの主張、これ等は更にさまゞな他の形に於ける當時の思想傾向と相關聯して、失敗せる革命の後に來たる一種の自棄的、反動的傾向を形成してゐるのである。千八百九十年代から千九百十年の頃に至るロシヤ文學の背景を說いて、異教的思想感情の主張、道德を無視する傾向、政治的興味への冷淡、絕望的幽鬱、性慾耽溺の傾向、群集に對する

貴族的な輕蔑の傾向をあげることが出來るとすれば、それはその半面に見られる宗教的求神的傾向や、極端な政治上の主張や、緊張した爭鬪的氣分や、プロレタリヤートの勝利の豫言やを忘れてしまはないかぎり、たしかに最も著しい特色を成すものであつたといへる。而してこれ等のさまゞな傾向を一貫して、最も强く人の眼を打つものはエゴの主張である。自我の主張、自我の慾望の滿足のために一切を顧みないといふ强烈な、傍若無人な態度、この中にはたしかに反キリスト教的異教思想のにほひがある。現行の道德に對する無視もしくは挑戰がある、群集に對する一種の貴族的な輕蔑の心がある。アルツィバーシェフは實にこの思想傾向を代表するものの一人である。サーニンの革命否定、自我の生存の主張、死の前に於ける獨自の生命の觀念は、實にこのエゴ中心思想に外ならない。一切の

「他のため」「理想のため」の事は夢であつて、たゞ自我の生存、自我の生命の緊張充實、自我の生命の光耀のためにのみ一切のものを認めるといふのが、サーニンの主張である。

性の問題が文學の上に大膽に取り扱はれるに至つたのは、人も知る如く、千九百五六年の革命後、政府が一般に(單に性慾方面にばかりでなく、社會問題その他の方面に於いても)檢閲を寛やかにした結果であるといはれる。たしかにさういふ事情も與つて力あつたといへる。しかし社會の興味が一般にこの方面に向つて集つて來たのには、心理的の理由がある。革命の苦み、殘酷、興奮、緊張の後のゆるみ、革命後の失望乃至絶望、自暴自棄、自殺の流行、さういふ氣分雰圍氣のうちに、また一方神祕的傾向とも相伴つて、性の問題が一般の興味の的となつた

ことは自然であつたといつてよい。

自我の主張、性の問題、死――殊に社會の犠牲としての死の疑ひ、これは革命を中心として起つた一般的の傾向として見られる。而してこれ等の問題をあはせて取り扱つたものはアルツィバーシェフである。アルツィバーシェフがこれ等の問題をあはせて取り扱ふに至つたところには、單に時代の傾向からのみ解釋することを許さない、彼自身に特殊な理由がある。アルツィバーシェフを見るものは必ずこの點にまで觸れなければならない。

五

コーガンはその『最近ロシヤ文學史』の第三卷の中で、アルツィバーシェフの『サ

ーニン』『人間の波』、及び『數百萬』の中から、人間の肉體に關する描寫を引用して、人間の肉體の要求が、彼の作に描かれた人生の契機であり、またその葛藤と悲劇との大多數を作つてゐるところの契機であることを言つてゐる。また彼が現實の事實に一切の基礎を置いて人生の葛藤を解かうとするリヤリストであることを言つてゐる。たしかにアルツィバーシェフは肉の詩人であるといふ意味で、「地上の子」であるといふ意味で、事物をその名によつて呼ぶことをおそれないといふ意味で、人間の生活であると自然の姿であるとを問はず、その生活なり景象なりの固有の心持ちに從つて、或ひは無遠慮に、或ひはやさしく、或ひは快活に、或ひは憂鬱に、その描寫の筆つきの自由に變化するといふ意味で、――すべてこれ等の意味に於いてリヤリストである。

しかし彼のリヤリズムは、現實を假借なく、發肅に、細心に、すなをに觀るといふだけの意味でなく、自己の心の實現にもまたすなをであるといふところに特殊の意味を帶びて來る。自己の心の現實から根ざしたリヤリズムとして見るときに、はじめて彼の作風の意味が明らかになつて來る。

政治に興味を感じない人々、革命のために自己の唯一の生命を犧牲にすることを欲しない人々、それ等の人々の心には、死をおそれる念が深く宿つてゐる。しかしその死をおそれる心は、アルツィバーシェフに於いて、一層特殊の意味を有つ彼には痼疾の肺患がある。彼も一時は革命そのものを描かうとした。しかし、彼の眞實の心の底には、革命そのものよりも強く彼を動かすところの死の恐怖、生の執着があつた。死の否定と征服而して生の高調、生の力の高調、犧牲の死の空

漠無意義と、現實の生存の自由大膽な享受、自由大膽な生存の享受をなし得る精力の横溢――これ等の意は一方『ランデの死』に於いて、また他方『サーニン』に於いて、アルツィバーシェフの歌うたところである。サーニンの生命の力の横溢はゑどまりあくまでも現世的肉的である。廣野に下り立つたサーニンは、結局この地上を距ることは出來ない。森林の中に朽ちて行つたランデの死骸のあとには、齒朶が驚くべき勢ひで繁り立つ。何れにしても肉の、地上の力である。肉の、地上の生存の執着である。ランデの死が殘して行く哀傷と寂寞との詩も、サーニンが殘して行く狂暴なほどの雰圍氣の震動の律も、要するに強き地上の肉の執着に歸着する。而してそこには作者の强烈な要求乃至自己補足の願ひが見える。また作者の自己哀憐の憩へがきこえる。ランデは破滅し行く生命の恐怖を現はし、サー

ニンは成長し行く生命の觀喜を現はす、ランデが藝術品として一層完成に近いといはれるのは、滅ぶものの哀愁を描き歌ふことは現實的であるからである。サーニンが性格としてさまゞの非難を受けるのは、作者の肉的生命の太陽として一個の人間を描くことが、一つの要求であつて、まだ現實になり切ることを許されてゐないからである。サーニンはアルツィバーシェフの正午であり、ランデはその薄暮である。或ひは寧ろ死を夢みつゝあつたおそろしき夜のあけ方である。生物の繁殖、齒朶の物すごいほどの繁りは、即ちこれをサーニンの正午に見る。サーニンはロシヤの文學に現はれた積極的の型に屬するか否かはともかく、少くとも作者の生存慾、現實執着の積極的な型であらねばならぬ。

六

しかし、サーニンがアルツィバーシェフの正午であるのは、その肉的生存力の一面である。作者は決してあらゆる方面に亘つてまでサーニンを理想化してはゐない。サーニンは革命の犧牲死と、作者の生存慾、現實執着との相結合して生み出だした、一種の社會的破產者である。この點に於いてもまた、作者があくまでもリヤリストであることが明らかに知られる。

ランデの理想が、ランデ自からを救ひ得なかつたばかりでなく、その理想のための犧牲はランデ自身の他に、尙多くの不幸な人々を作り、且つ殘して行つた。ランデの理想は彼が長い徒步旅行の間に出あつた百姓の言つたやうに、空語に過

ぎなかつた。ランデの理想と地主や僧侶たちの考へとは全く別でもあらう、しかしそれが實際の事になつて來ると、この兩者は全く一つ結果を生む。人間が先づ互ひに哀れみ愛しさへすれば、それ以外のことはだん〳〵に皆よくなる——一方は自己の稚醇から、他は自己の利害の打算から、恐らく同じことを言ふでもあらう。しかしそんな言葉が何になる。毎日のパンの一片にも困つてゐるときに、そんな言葉が何になる。百姓がランデに答へたときに、ひそかに示した憎み、それはつまりさういふ言葉の結果が自分等の餓と苦しみとを救ふものでないといふ心から來てゐたのである。そこにロシヤの百姓たちロシヤの民衆とインティェリゲンツィヤとの間の到底越えることの出來ない溝を作つた原因があるといふことを意味してゐたのである。ランデは一面アルツィバーシェフのロシヤのインティェリゲン

ツィヤに對する非難を意味する。サーニンの破壞と否定とは、明らかに現實の事實に基かない一切の道德律に對する反抗を意味する。しかしサーニンの破壞と否定とは、現實を直視し、現實の是認を必要とすることを敎へたと同時に、肉的生存慾の正午の形のまゝで、たゞ廣い野原へ走り出してしまつたまゝで終つてゐる。それから後はどうすればよいか。やはり地上より他に行くべきところはあり得ない。現實の幸福を打ち立てることの外には何ものもあり得ない。いかに水平線の直ちに天につらなる如く見える廣いロシヤの野原を驀らに驅け進んで行つても、水平線は永久に天へは屆かない。地上の現實に出でたものは必ず再び地上の現實にかへらねばならぬ。サーニンは廣野で亡びるかも知れない。しかし亡びないためには再び人間の、現實の世界へかへらねばならない。この意味でサーニンは一

面現實に於けるインティリゲンツィヤの破産であつた。

アルツィバーシェフは千八百七十八年の生れで、今年は四十四歳になる。千九百十七年の革命後『自由』といふ週刊の評論新聞を獨力で出してゐた。最近にはやはりモスクワに住んでゐて、病がちであまり書かない。ときゞ政府の『藝術館』で作品朗讀をしたりしてゐるとあり、外國旅行は許されなかつたともある。自然右の週刊新聞などはもう出してもゐないのであらう。

附記、上の一篇を書いたのち、近着のあるロシヤ語新聞の文藝欄で、アルツィバーシェフの最近の消息を讀んだ。それによると、彼は今も尙モスクワにゐるが、最近に於いて全く盲目となり、且つその上に聾してしまつたとある。彼の肺患はその二十歳の時から初まつて、それが原因となつて、腎臟を病み、更に皷膜を破つた

ことがあるから、全く盲し且つ聾してしまふやうになつたのもその邊から來てゐることとも想像せられる。

アルツィバーシェフは最も死をおそれた人である。彼の作品の凡ては、いろ〳〵の意味で、この深く鋭い死の恐怖から來た生の抵抗、爭鬪絶望の記錄であるとも見られる。生の執着、殊に肉體生存の執着の深く鋭く强きこと彼の如き人にして全く盲目となり全く耳聾するに至つたといふことは、彼がまだ四十四歳に達したばかりである事實と想ひ合せて、運命の奇ともいふべきものを感ぜしめられる。

最後の一線 上

米川正夫譯

最後の一線

裝釘　佐々木猛

一

小さな町は曠原の中にぽつんと立つてゐた。若し人が町を出端れて、歴氣樓の樣な遠い野や、地平線の上を匂ふ遙かな森の幻や、無關心な高い空などを眺めたならば、此の地上に住んで苦しみ乍ら死んで行く、一團の人々の詰らない存在は、決して悲劇的な美文めいたものではなくて、平凡なと云ふより寧ろ退屈な眞理に過ぎない事を、明瞭に曉るに相違ない。

夏は燒ける樣な太陽が曠野の上に懸り、冬は此の曠野が一面に白皚々たる世界となつて擴がつた。熱い夏の夜などは山の樣な黑雲がむく〳〵と抬つて、雷鳴が雹を流し

た様な廣い々々空間を、勝誇つたやうに端から端へと轟き渡るのであつたが、併し曠野は何時も同じやうに憮げな、謎の様な、人間とは何の關りもない様な姿をして居た。

風が吹き起ると、曠野の中に細かい乾いた埃が舞ひ立つて、宛然生の通つてゐない幻の軍勢か何ぞの様に、絶間なく町の方へ押寄せて行つた。埃は家々の屋根や窓に降り積つたり、じつと澱んで動かぬ川水の上に落ちたりして、自分の意志を持たぬ柔かい層となつて町全體を蔽ふのであつた。さうすると町は世界と共に古い、老朽し切つたものゝ様に感じられた。此町の中に在る一切の物が單調で貧弱で、危く風に吹き散らされるのを免れて居る、塵埃の堆積の様であつた。

かうした灰色の田舍町にこそ、緑の木立や、薔薇色の山や、青い海や、莊麗な建物の間などに先んじて、蒼ざめた死の幻影のやうな思想が生れ出る可能が有つた譯である。此思想は後に世の中へ出て行つゝ、地球の全面へ擴がつたのである。

海中へ投ぜられた巨岩は跡方もなく消えて了ふけれど、靜かな池の面へ落ちた小石は、必ず遠くの方まで澤山の圈を擴げる道理で、大都會の喧騒の中で毎日何時ともなしに行はれて居る様な事が、此の町では人の魂を底の底まで震撼し、多くの人の心を動搖させるのであつた。

其後になつて事情を探求した人々は、土地の富豪アルブーゾフの工場に新しく招聘せられた、ナウーモフと云ふ技師にすべての原因を發見したのである。それは如何にも有りさうな事であつた。此の陰欝な男の影が町の生活に蔽ひ懸つて、實際事件の開展促進に並々ならぬ影響を與へたのである。併し本當に目を睜いて周圍を見廻したなら、如何なる人間の力も、人生の中に潜んでゐる物を、一厘一毛も增したり減したりする事は出來ない、と云ふ事を觀取しない譯に行かないであらう。實際人生に於けるすべての物は、深い〳〵大地の底に根を下してゐて、その根から次第々々に幹が延びて行つて、晩かれ早かれ避くべからざる結末に到着するのである。

静かで平凡な日常生活や、慌ただしい混亂雜踏などの間に、もうずつと以前から奇怪な恐しい大事變（カタストロフ）が、徐々として熱して居た。併しその突發する三四ケ月前までは、一切が飽くまで平凡に退屈に感じられた。小さな町は暑さに喘ぎ惱んで、世間並な生活が靜かに營まれてゐたのである。

出稽古から出稽古へと忙しげに馳け廻つてゐる、チージュと云ふ小柄な大學生も、到底救はれる見込の無い樣な腹立たしさを覺え乍ら、倦怠の念に惱まされて居た。

色の褪めた青いバンドの付いた、古びた白い學生帽は、耳の邊まで被さる程深く、尖つた頭蓋の上に載つてゐた。その下では樣々の想念が絶間なく動いて居るのであつた。彼が大都市に居住する權利を奪はれて、此の田舍町に尻を据ゑてからもう二年になる。而も何時か此處から足を洗ふと云ふ望みは全然無かつたので、心の底から此町を憎んでゐた。惱ましい程、胸の痛む程憎んでゐた。何處か他所（よそ）の方では人類の偉大な爭鬪生活が數百萬の火花を散しつゝ、苦痛と歡喜の中に呻吟や叫喚の聲を發し乍

ら、徐々と鍛へられて居るにも拘らず、此處では開闢以來誰一人として、高調した言葉も聞かなければ、生きた顏も見た事が無いかの樣であつた。皆眠つてゐるのでもなければ、姿を潜めたのでもなく、又全然生きて居ないのでも無い。只道傍の埃の中に捨てられた一塊りの虫けらの樣に、うゞ〳〵と蠢めいてゐる丈なのであつた。

太陽は町の眞上に懸つてゐた。そして空氣は暑熱の爲めに慄へ乍ら、炭火（すみび）の火氣（くわき）の樣にちら〳〵と垣根傳ひに流れて居た。がらんとした並木街に立つてゐる、憫れな骸骨の樣なアカシヤの木は、骨ばつた枝を力無げに垂れ、その下にはまるで他人（ひと）の物みたいな、貧弱な、乾からびた陰が横たはつてゐた。殆どすべての窓は太陽（ひ）を避ける爲めに鎧戸を閉めてあつたが、その中で汗にまみれてぐつたりとした無思想無感覺の人々が、炎熱と倦怠の爲めに、惱ましげに喘いでゐる樣（さま）が想像された。何も彼もまるで死に盡したやうになつて、雀共の囀りさへ聞えなかつた。チージュは汗みどろになつて、並木街を走り乍ら罵るのであつた。

「畜生めら！……こんな忌々しい所へ何の必要があつて町を立てたのだ！……一躰他に場所が見付からなかつたのだらうか、まあ考へても見るがいゝ！……一體が誰あんな連中を此處へ引つ張つて來たのだらう？……實際此の世界には森だつて川だつてあるぢやないか……それだのにわざ〳〵面當か何ぞの樣にこんな所へ……何と云ふ厄介な馬鹿者等だらう！」

憎惡の念が彼の胸を締め付けた。併し何よりも不可ない事には、其れは對象のない憎惡だつたのである。チージュは複雜な必然の網が、かうした曠野よりもつと惡い所へすら人間を馳り立てゝ行く事を、人一倍よく承知してゐた。若し誰か人が訊ねたならば、チージュは別に大して思案もしないで、『そんな事は問題ぢやない。人は何んな所に生活しても、依然として最も廣く豐かな意味に於いて人間であり得る』と答へたに相違ない。併し何かしら或物が彼を壓伏して、彼と太陽の間に立塞り乍ら、未來の代りに何やら灰色な空虛な物を指し示した。それが彼の心に絶間なく神經的な憤懣を呼

び起して、すべて周圍の物に毒を注ぎ掛けさせるのであつた。

並木街の向ふの端からチージュの方へ向けて、制帽を被つた一人の男が歩いて來た。邊りは極度な空虛と死の氣に充ちてゐるので、がらんとした大きな廣場の中に現れた生きた人間の顏が、不愉快に感じられる程であつた。廣場の上には幾棟かの赤煉瓦の店と、太陽で白熱せられたやうな白塗りの敎會が、じつと不動の姿勢を保つてゐた。宛然永久に鎖された樣な、重々しい敎會の鐵扉の上には、大きな錠前が下つて居る。

近視ではあつけれど、チージュは未だ大分遠い處から、知合の會計官吏ルイスコフだなと氣が付いた。ルイスコフは全然呑氣さうな、と云ふより寧ろ輕率な態度で杖を振廻し乍ら、ゆつくり〳〵と歩いて居た。チージュは擦れ違ひ樣、馬の樣な齒をして、色の無い小さな目を光らせてゐる、黃色な長い顏を平然と見やり乍ら、一寸帽子を抬げて、さつさと先へ走つて行つた。ルイスコフが杖を振廻しながら一方へ進んで行く、とチージュは猶一層忙しさうに反對の方へ歩いて行つた。彼等は互に何一つ言ふべき

事が無かつたのである。

若し小柄な大學生が今少し注意深くルイスコフを見詰めたならば、彼は必ずその表情に打たれたに相違ない。會計官吏の小さな鈍い目はじつと動かなかつたけれど、その中には緊張した、化石の樣な思想が凍り付いてゐたのである。正しく間隔を置いた其の長い足の運動も、一寸上へ向けた儘じつと動かない顏も、まるで自働人形か何ぞの樣に、少しも生の通つてゐない、息窒るやうな印象を與へるのであつた。彼は他人の意志に依つてその運動を押止められ、何の必要もない馬鹿々々しい螺旋人形か何ぞの樣に傍へ片付けられて了ふ迄、永久にこつ〳〵と歩き續けるだらうと思はれた。

併しチージュは此の咀はれた町の有つてゐる物に、何から何まで飽き々々して了つて居たので、此處には極めて平和で平凡な、俗惡な物以外何一つ存生し得ない樣な氣がした。その上彼は心底からルイスコフを輕蔑してゐた。何故なれば自分の興味の圈外に住んでゐる、一切の人間を輕蔑してゐたからである。會計官吏の顏は彼の心に新たに油然として湧き出る、憤懣の情を呼醒すばかりであつた。

『ふん、あれでも矢張り生きてるのだ』蒼褪めた額から汗を拭き乍ら、チージュは機械的な苛立しさを覺えつゝかう考へた。『而も何うだらう、まるで何か偉大な事業でもしてる樣な積りで居るのだ！……終日汗みどろになつて蠅を一杯集らせ乍ら、何だか譯の分らない事を書いて、會計課長にぺこ〳〵頭を下げ、簿記方の首席を豪い人の樣に思つてるのだ……それから娘つ子共と一緒に並木街を散歩して、一番終ひに其中の一人に幸福を授けてやり、新しい會計官吏を半ダース位生ますのだ。そして其の中の一人が簿記方の首席になるかも知れない――おゝ何と云ふ幸福だらう！……一體簿記方の首席が何だといふのだ？……本當に彼奴何だつて首を絞らないんだらう、忌々しい！』

チージュは若し自分があんな生活をしたら、三日と生きて居られない樣な氣がした。毒々しい想念は次から次へと走つて行つたが、當のチージュは殆どそれに氣が付か

ないのであつた。

『何か事が起ればいゝなあ！……せめて地震でもあればいゝのに！何處か他所の國では、全く地震があると云ふぢやないか！何でも酸鼻の極ださうだが……ちよつ馬鹿々々しい！酸鼻の極どころか有難いお惠みだあ。家が倒れて、大地が震へ女が裸で馳け出して、誰も彼も自分が何者かと云ふ事も、亦何う云ふ譯で何の意味かなどゝ云ふ樣な事も、みんな忘れて了ふのだ……其處には又自己犧牲もあれば掠奪もある。彼方では誰やら救けたと云ふ者もあれば、此方ではどさくさ紛れに强姦した者もある……實に愉快だ！……俺は地震なら大賛成だ、何も決して……酸鼻の極だつて！何百萬と云ふ人が死骸の狀態に陷るのは、決して酸鼻の極ぢやない！……ちよつ！』

チージュは忌々しさの餘りぺつと唾を吐いた。そして突然立止つた。

『商人の子供等の所へ行くのは未だ早いやうだ……一つダヂーチェンコの所へでも寄つて見ようか？』

さうする丈の價値が有るか無いか未だ決めない中に、チージュは機械的に横町へ曲つて、耳門を開け、埃つぽい草のぼう〳〵と生えた大きな內庭へ入つて行つた。

まるで此の前に恐しく愉快な事でも有つた樣に、彼は直ぐ堪らなく愉快になつた來た。もう寧そ引返さうかとも思つたが、これは毎日の事だつたので、チージュは何時もの樣に惱ましげに手を振つて、人の足跡で自然についた草の中の徑づたひに、氣難かしげな顏付をしながら、內庭の一番奥に立つてゐる斑剝げの、空色に塗つた離れ家を指して歩いて行つた。何處か倉の蔭の方で、犬が吠え出したが、暑い日向へ出て來なかつた。牡鷄が三羽に牝鷄が一羽、羽毛を脹ませ乍ら垣根の下に蹲つてゐた。離れ家の向うには埃つぽい庭の木立が、寢恍けたやうに突つ立つた居た。

チージュは暗い廊下へ入つて、手探りで扉の把手を掴み、叩もせずに大きな汚い室へ一歩踏み込んだ。その中はまるで穴藏の樣に涼しくて靜かであつた。先づ彼の目に映つたのは、汚い敷布の揉みくたになつた、未だ片付けてない二つの寢臺と、窓仕切り

に載つた麥酒の壜と、煙草の吸殼と、ばら〳〵になつた本などであつた。室の眞中には箒が一本投げ出してあつたが、その下から何かの反古らしいものが、辛抱强く顔を覗けてゐた。

二人の大學生は卓を挾んで、一生懸命に將棋の盤を眺めてゐた。その蓬々とした頭は低く屈められて、巾の廣い若者らしい肩は、餘り長く座つてゐる爲めにぐたりと垂れてゐた。

「又やつてるな、情ない連中だ！」冗談とも付かず本當に憤慨してるとも付かず、チージュはかう言ひ乍ら杖を片隅へ立て掛けた。「未だ飽きもしないのかねえ？」

二人の棋客は首を上げて、對手を見ようともしずに手を差し伸したなり、又もや將棋の方へじつと目を注いだ。

「それに此の暑さは何うだ、やり切れやしない！麥酒でも御馳走して呉れるかね？」チージュは帽子を脱いで、暑さと疲勞の爲めに蒼白くなつた額を拭ひ乍らかう訊ねた。

濕つた髪の毛がぺつたり〳〵つ付き合つて、まるで鳥の毛冠の樣に馬鹿々々しく、頭の上にぴんと立つてゐる所は、本當に鷲の樣であつた。

棋客の一人が無言の儘窓の上の壜を指さすと、將棋盤の上の駒を一つ動かした。

「よう豪勢だな！」今一人が大儀さうな低音でかう言つた。

チージュは殆ど山盛になる程なみ〳〵と杯に麥酒をついで、ぐび〳〵と長い間美味な冷い液體を吸ひ込んだ。餘りの心地よさに喉が鳴る程であつた。

「あゝ、いゝ氣持！」濡れた鬚を拭きながら、彼はかう言つた。「ダ并ーヂェンコ、新聞は着いたかね？」

「えゝッ」肩巾の廣い美しい大學生が、振向うともしずにかう答へた。がつしりした其肩の上には、色の褪めた更紗の襯衣がまるで水でも浴びせられた樣に、ぐつたりとくつ付いて居た。その襯衣の下にあるのは人間の肩ではなくて、鐵で鑄た彫像の逞しい筋肉か何ぞの樣に思はれた。

「ミーシュカ、新聞は何處にあるんだ?」とチージュは執拗に追窮した。自分は何もする事が無いのに、人が何か仕事をしてゐるのが、退屈でもあれば忌々しくもあつたのだ。

痩せたミーシュカは薄色の髪をした賢さうな頭を上げて、物思はしげな、心持沈み勝ちな目付でちらと天井を見遣つた後、

「寢臺の下にある」と言つた。

チージュはぺつと唾を吐いて、示威的な態度で寢臺の下へ潜り込み、新聞の上から吸殻や埃を拂ひ落し、窓の傍に座つて讀み始めた。

邊りはひつそり閑としてゐた。そして新聞が喧しく書き立てる、かの巨大な騷がしい生活は、此のがらんとした汚い室から遙か遠く隔たつて居た。窓の外では木の枝が微かに動いて、緑の影が天井をゆら〳〵してゐた。何處か近い所で雀が物問ひ度げにちうと一聲囀つたが、まるで物に驚いた樣に止めて了つた。チージュは新聞をがさ〳〵

云はして居るし、ミーシュカとダヂーヂェンコは無言の儘、將棋盤を睨んでゐた。盤の上の小さな轆轤製の駒は、自己獨特の眞面目な、規則正しい、複雜な生活を營んでゐる、一種神秘な小さい人間達に似てゐる樣でもあれば、似てゐない樣でもあつた。

チージュは馴れた手付で大きな新聞紙を折返し乍ら、一生懸命に讀んでゐた。時々彼は麥酒を杯についで、泡の中に深く鬚を沈め乍ら、ぐびり〳〵と緩り飲んでは、又新聞に讀み耽るのであつた。

彼の前には廣い世界の目まぐるしく重苦しい生活が、活字の列の間に展開して行つた。寢惚けた樣な田舍町へ置き去りにされた、チージュの生き〳〵した想像には、それがまざ〳〵と鮮明に映つたのである。彼は今かうして讀んでゐる中に、ペンを走らす雜誌記者や、汗水滴らして拵いでゐる勞働者や、一心に議論する議員や、死刑を執行する首斬人や、まるで所作劇の樣に物々しく行儀よく互に會釋し合つてゐる君主や、かう云ふ人達を目の前に見る樣な心持がした。

此の偉大なる將棋の勝負は、依然として續いて居るのであつた。そして勝利は絶えず一方から又一方へと移つて居る。併し何方か一方の狀態が可成絶望的に思はれる事もあつたけれど、結局永久に勝負無しで終るに相違ないと云ふ事が、朧氣ながら感じられるのであつた。

併し小柄な大學生にはかうした灰色の總計が目に入らなかつた。歴史の車は一つ所を廻轉して居るのでなくて、行手に當る一切の物を粉碎しながら、どん〳〵前へ進んで居る樣に思はれたのである。人生がかう云ふ風に混沌とした、絶望的な性質を有してゐるのは、ほんの昨日か今日か、長くて明日くらゐの間に過ぎないので、その中に遠からず偉大な波が襲つて來て、すべて古い汚いものを洗ひ去つた後、數學的に公平な、整然とした幸福が人生を支配する樣になる、其時は追放に處せられた一介の大學生で、遲かれ早かれ死すべき運命を持つた微々たる一箇の人間に過ぎない自分も、自己の分け前、自己の意義、自己の義務を有する筈なのである――とかう彼は確信して居

た。

それ故目下此國で行はれて居る一切の事、諸新聞紙が口角泡を飛ばして論じてゐる一切の事が、彼を興奮させ惑亂させるのであつた。

「畜生何と云ふ事だ……ダギーチェンコ、君は讀んだかね、サマトラで……」チージュは大きな聲で興奮した樣に言ひ出した。

「えゝ糞つ！……つひうつかりして居たぞ！」とミーシュカは叫んで蓬々とした薄色の髪を搔き上げ乍ら、椅子の上で身を動かした。

「うつかりするのが惡いのさ。子供の根つ木遊びぢやないからな」とダギーチェンコが注意した。

チージュは忌々しさうな、非難する樣な目付で二人を見遣り乍ら、馬鹿にした樣に肩を竦めて麥酒を注いだ。

「此處で何うしてやつたらいゝかなあ？」ミーシュカは空想的な目付をし乍ら、物思

はしげにかう言つた。彼は一寸考へて耳の後ろを掻いたが、やがて盤の上の駒を一つ動かして、恐しく斷乎として調子でかう言つた。

「王手！」

チージュは吐息をついた。急に彼はサマーラに於ける七人の革命家の絞刑も、さして大事件ではないと云ふ氣がし出した。此の七人の者がルイスコフや、ミーシュカやダ井ーヂェンコの樣な手合ひに思はれたのである。彼等の顏が僧げに退屈さうにチージュの方を眺めた。と、こんな奴等が首を絞められたつて、なん何の知つた事があるものかと云つた樣な心持が、殆ど無意識に彼の頭を掠めた。

小柄な大學生は新聞を疊んで、氣難かしげな顏をし乍ら立上つた。

「ぢや僕は出掛けるよ」別段誰に向いてともなしにかう言つて、彼は片隅から自分の帽子を取り上げた。

二人の棋客は顏を上げようともしなかつた。

青い煙が丁度葬式の時の香のやうに、二人の頭上に立昇つてゐた。綠色の影はまるで魔法でも掛ける樣に、音もなく天井の下をゆら〳〵して居た。

チージュは又草の生えた內庭を横切り、だるさうな犬の吠聲を聞き、垣根の下に蹲つてゐる三羽の牝雞と一羽の牡雞を見た。そして往來へ出た時ふと機械的に考へた。

『一體雞は汗を掻くものか知らん？』

此の疑問が不思議な程氣になり出した。彼は長い間記憶を呼び醒さうと努めたり、心の中で無數の書物の頁を繰つて見たりして、始めは論理、後には想像で問題を解決しようと試みた。そして漸く雞と雖も汗を掻くべきであるが、併し汗を掻いた雞などゝ云ふのは、全然馬鹿げた事だといふ結論に到着した時、彼は始めて我に返つて、憤然として唾を吐きながら、橫町から駈け出したのである。

二

前よりもつと暑くなつた樣に思はれる。空氣は白熱した火の樣に燃えて慄へて居た。

地球全體が恐ろしい太陽の怒りを受けて、びくとも身動きする勇氣さへなく、じつと身を潜めて居るかの樣であつた。未だチージュは横町を出ない中から、もう汗が五月蠅くねと〳〵と額を流れて、睫の上にぽた〳〵滴れたり、いやに惡醜い汁がぐたりと垂れた鬚や唇の上へ落ち懸つたりするのであつた。目の中が暗くなつて、蜂谷はまるで固い槌で叩かれる樣にづきん〳〵して來た。

チージュは自暴自棄になつて了つた。

『一寸暫くの間退却しようかなあ！』

で彼は倶樂部へ寄る事に決めた。

倶樂部の白い二階建の建物は、空虛として涼しかつた。開け放された圖書室の戸口からは、誰にも必要の無ささうに見える書物が、整然と並んでゐるのが窺はれた。金箔で押した書名が硝子越しに儼然と輝いて、おごそかに空しい室々を睨んでゐる。骨牌室ではロムベル用の小卓が、人待顔に綠色の面を並べてゐた。邊りは敎會の樣にしん

んとして居たが、只料理場の方で切れ〴〵に皿の鳴る音が聞えた。チージュは帽子掛けに自分の帽子を引つ懸けた。其處には見覺えのある醫師のアルノルヂイの帽子が、たつた一つ懸つてゐるばかりであつた。彼は華奢な足をした、ロムベル用の小卓の間を縫つて廣間を通拔け、食堂の中へ入つて行つた。

醫師のアルノルヂイは其處に居た。彼の前には火酒の入つた硝子の壜が置いてあつて、當の醫師は暑さに喘ぎ惱む偉大な體をどつしと据ゑて、白ソースに薄い山葵の汁を懸けた脂つこい料理を平らげてゐた。ゆつたりした支那紬の背廣服は腋の下がぐつしより濡れて、頸の所でしつかり結んだ糊付のナプキンの兩端が、豚の耳か何ぞの樣にぴんと突立つて居た。

「今日は醫師」とチージュは言つた。

アルノルヂイは何やら妙に喉を鳴らして、まるで長老の樣に肥つて柔い手を差出した。そして目で知らせ乍らかう訊いた。

「火酒は？」

「いや何うして、そんなものを！……こんな熱さにわざ〳〵火酒を飲むなんて！」さも憤慨した樣な調子でチージュは手を振つた。

「でも一杯くらゐ！」と醫師は喉を鳴らした。

「いや有難う、澤山です！」極度の嫌惡の色を浮べ乍らチージュに口を歪めた。そして倚子を取つて醫師の向うに座を占めた。

開放した窓からは廣い消防隊の庭が見えて、其處から甘酸つぱい樣な馬糞の匂や、埃つぽい乾草の臭が漂つて來た。細長い物置の下には、力無げに轅を上へ撥ね上げられた水槽馬車（露西亞の曠原地方は水鉄乏の爲め一般用水を運搬分配す但し此場合は消防用水―譯者）が立つて居て、同じ樣に暑さに惱んでゐるやうであつた。高い柱の上に吊されてゐる銅の鐘がぎら〳〵と太陽に輝いて、その中から一本の長い綱が、まるで舌でも吐き出した樣に、だらりと垂れて居た。

「暑いですね」とチージュが言つた。

「さう、暖いですな」と溜息でも吐くやうな調子で言つて、醫師は皿を鳴らした。

まるでたつた今髪毛を掴んで引き廻された樣に、恐しく頭を蓬々させた、眠恍け眼のボーイは、突然膳棚の所から馳け出して來たが、途中で何の用かと云ふ事を想ひ出したらしく、又臺の方へ引返して、新しく仔豚の冷肉に白ソースを掛け始めた。

「ねえ醫師」チージュは倦怠に惱んでゐる樣な、突つ掛るやうな調子でかう言ひ出した。「一體あなたは此の惡魔の陷穽のやうな土地に、未だ愛想を盡かさないのですか？もう十年も此處でぼんやりしてるんでせう……」

「十七年ですよ」仔豚の肢を皿の上へ抛り出して、それに白ソースをうんと塗り付けながら醫師はかう訂正した。

チージュは忌々しげに頰骨をぴくりと動かし乍ら、外方を向いて了つた。彼は少しも食ひ度いとは思はなかつたが、それでも矢張口の中に唾が湧いて來るのであつた。彼

は消防隊の庭を見遣つたが、今度は自分自身の肥満した偉大な體を持て餘まして、息を切らしてゐる醫師に視線を轉じて、妙に考へ込んで了つた。理由のない憂愁が彼の心中に動き始めたのである。

醫師のアルノルヂイは杯に火酒(ブランデー)を注いで、片目を細い乍ら長い間明りに見遣してゐたが、やがて何とも見當の付かぬ表情を以つてかう言つた。

「何處も行く所がありませんからね……」

「何うして無いのでせう?!」とチージュは癇走つた聲で叫んだ。「此處を出て西伯利へでも行つたらいゝぢやありませんか!」

「いや、西伯利はもつと惡いですよ」醫師のアルノルヂイは平然たる調子で抗言した。

チージュは笑ひ出した。

「いや、そりや勿論西伯利へ行くんぢやありません……併し……あなたは獨り身で

はあるし、金に困つても居られない樣だから……一つ外國へでも出掛けたらいゝぢやありませんか」

「外國だつて私はすつかり見て來ましたよ」年取つた俳優のやうに脂ぎつた、奇麗に剃り上げた唇をナプキンで拭き乍ら、アルノルヂイはかう答へた。

「すつかりですつて?なあに、あなたは何にも見てやしませんよ!」

「何も彼も見ました」と醫師(ドクトル)は大儀さうな聲でかう言つた。

「と云ふと、例へば?」

「此の世にある物一切……人間も、芝居も、鐵道も……私はすつかり見ましたよ」

「併しまさかあなたは宇宙全體を見たと仰有る譯ぢやありますまい?」とチージュは突つ掛る樣な態度でかう訊いた。

「そりやあさうです」と醫師は落付き拂つて同意を表した。

「こりやあ何うだ!」チージュは眞底から驚いてかう叫び乍ら、好奇の眼(まなこ)を睜つて醫師

を見詰めたが、やがてから〳〵と笑ひ出した。

醫師のアルノルヂイは皿を向うへ押しやつて、几帳面にナプキンを疊んだ後、膳棚の方へ向いて、何かしら共濟組合員の合圖めいた手振をした。此處では醫師の合圖を全部飲み込んでゐるらしく、ボーイは直ぐさま麥酒の壜を持つて來た。

「やりませんか？」と醫師は訊いた。

「麥酒なら悅んでご馳走になりませう！」とチージュは答へた。

醫師は二つの杯に溢々と注いだ。彼が注いでゐる間ぢう、二人の者は氷の樣に冷い甘さうな液體が、ぽつと汗を掻いた硝子の中で黃色い火花の樣に踊るのを、じつと一生懸命に觀察してゐた。見てゐる中に、體が涼しくなる樣な氣持さへするのであつた。

「ではあなたは世界中を見盡したと仰有るんですね」チージュはすつかりいゝ氣持になつてかう訊ねた。

彼は醫師を愚弄してやり度くなつたのである。

「まあお聞きなさい」と醫師のアルノルヂイは答へた。そのどんよりした小さな、併し利口さうな目の中には、少しも活氣づいた樣な表情が見られなかつた。「無論世界中を見盡した譯ぢやありません……その爲めには餘りに多くの時日と勞力を要しますからね……併し私は此の世界に關してある觀念を持つてゐますから、私としてはそれ丈で澤山なのです……」

「何だ……いや、それ丈では決して澤山ぢやありません」自ら信ずる所ありげな、自己の優越を感じてゐる樣な調子で、チージュは駁論した。「問題は概括的な觀念でなくして、人生と自然のデテール其物にあるのです……美と云ふものはつまり色彩と、形狀と、習慣の多種多樣な點に含まれて居るのです……何うしてあなたはそれが分らないのでせう？」

「私には何でも分つてるのです」アルノルヂイは恬然たる調子で辯駁した。「但しそれは私の空想の中だけの話ですが、その方が却つて變化が多いですよ」

「と云つてつまり何うなのです？」

「何うもかうもありません……極簡單です。一體外國に何があります。海は何時でも青くなければ綠色です。所が私は假令夢の中でも、虹の色をした海を想像する事が出來ますからね……ほら何かに綠いろの水精（ニムフ）の住んでゐる黑い湖を、詩的に描寫したものがあるぢやありませんか……それは底なしの湖なのです……え何うです！……エヴレスト山は八露里（一露里は我約十町）も高さがあると云ふ話ですが、私は其エヴレストより百倍も高い山を想像する事が出來ます……昔噺には水晶の城や、牛乳の川や、物を云ふ鳥さへ有るぢやありませんか……何うです！」

「そりやあ昔噺でさあ！」チージュは氣難かしげに言葉尻を引いた。

「何だつて同じ事ぢやありませんか……」と肥えた醫師は手を振つた。

チージュは一寸考へた後、

「ぢや人間は？……變つた習慣や、風俗や、典型や、そんな物はあなたに興味がないのですか？」

「ありませんね」アルノルヂイは懶げに答へた。

「習慣も何もあるものですか……何處へ行つても生存競爭とか何とかそんな物ばかりです……分つてまさあね。古い物を新しく見せ掛けた丈のもんです。私だつて子供ぢやありませんからね……何處へ行つても同じ樣に醜惡で、只その退屈さ加減がそれぞれ違つてる丈です……いやそれさへ違つては居ない、全體が同じ樣に退屈なんです」

「ぢやつまりあなたに取つては何も彼も同じ事なんですね？」

「でなきや何うなんです？無論さうですよ。何んな人間だつて結局死ぬべき運命を持つてゐるので、みんな自分の生活に滿足してゐない。それから後は……まあ何ですよ、或者はシルクハットを被つてるし、或者は木の皮靴を履いてゐるし、又或者は跳足で歩いてゐる位の相違で、そんな事は私に取つてまるで風馬牛でさあ」

チージュは不滿足らしい樣子で、肥滿した醫師の言葉を聞いてゐた。その尖つた鳥の

様な顏は、死んだ人間に對す〻様な侮蔑的な憐憫の色を表はして居た。

「ぢや宜しい」ほんのお義理で會話を續けると云つた樣な工合で、彼はかう言つた。

「所が文化に就いては何うお考へです？……もう現に彼方では空を飛んでゐますよ……あなた御承知でせう？」

「飛んでゐるんですつて？」

「さうです！」まるで航空術の成否が自分一人に懸つてでも居る樣に、得々としてチージュは答へた。

「まあ勝手に飛ばしたらいゝですよ。何うせ大した飛び方は出來やしないのだから……」

醫師がかう言つた調子は、到底救助の見込のない程退屈さうであつたので、チージュは會話を續けようと云ふ意志をすつかり失くして了つた。かうした考へ方は餘りに自分から懸け離れてゐて、殆ど理解に苦しむ程だつたので、彼は醫師の誠實さへ疑ひ度

くなつた。

『これは只露西亞式の怠惰病に取り付かれた丈の話だ！』と彼は氣難かしい心持でかう考へた。

小柄な大學生に取つて生活は沸騰であり、自然は汲めども盡きぬ富と美の寶庫であつた。

零落した地主の半ば崩れ掛つた邸以外、壯麗な宮殿など見た事のない貧しい百姓が世界でこれ以上豪奢で美しい物は無いと考へてゐる樣に、チージュは瑠璃色の海や、房々と枝葉の繁つた木立や、薔薇色の山などを持つた此の地球が、美の極致である樣に思はれた。彼の思想は常に地の上ばかり這つて、無限の空間、水晶のやうな永遠の冷たさ、數億萬の輝く星、偉大な力强い永劫の不動——かう云ふものゝ世界たる天上へ昇る事が出來なかつたのである。

佗しい無意味な人間の生活は彼の心に、崇敬の念を呼び醒すのであつた。哀れな國

民共が自分の愚かな爲めに推戴した、小やかな暴君と闘つてゐる事や、貧弱な船を造つたり腫物を治療したりする科學や、一生懸命に自然に近付かうとして居る藝術の事など考へる度に、彼は頭が燃えるやうな氣がした。嘗て以前幾百萬となく存在して居た物と同じ樣に、何れは『過去』の霧の中に沒し去るべき運命を有つた、新しい生活樣式の實現を空想みながら、彼が參與した熱烈な運動は（併しこれも實際彼自身にさへよく分つて居なかつたのである）、絶對の眞理のやうに感じられた。若し思ひ掛けない事情が起らないで、自分が石造の家や、鐵道や、大群集などの間に住む事が出來たならば、自分の生活にかうした空虛はなくて、すべては第一義的の經驗や、人類の幸福に貢献する重大な事件に依つて充實されたに相違ない、とかうチージュは考へたのである。

今彼の生活は何の目的も無く、馬鹿げて退屈であるけれど、此の生活が曠原の上を

流れる霧のやうに過ぎ去つて行くのは、チージュの考へに依ると生活其の物の罪ではなくて、この小さい田舍町や、憲兵や、肥つた醫師などが惡いのである……

チージュは眠たさうに冷い麥酒を飲んでゐる醫師のアルノルディを、まるで始めて見る物か何ぞの樣にじつと眺めた。

『あれでも元は人間並だつたのだらう！……十年間流刑に處せられたとか言ふ話だつて、麥酒を飲んで、そして歩き乍らこくり〳〵眠るのだ……一體此男に何か少しでも思想らしいものが有るだらうか。それとも本當にあれ丈の物で、只の寢言に過ぎないのだらうか？……あゝ人間も僅か何年かの間田舍の泥沼に浸つてゐると、あゝまで深く底の方へ引込まれて了ふものだらうか？』

チージュは急に胸苦しい樣な氣持がして來た。彼自身も時々極度に迄無關心な狀態に陷つて、何うかすると讀む事も、働く事も、考へる事も厭な日が有るのを、

いと想ひ浮べたのである。

『段々退化して行くのだな』心中秘かに慄然とし乍ら彼は考へた。『これは一つ手綱を締めなくちや駄目だぞ』

それから又彼は、アルブーゾフの工場に働いて居る、社會黨の勞働者の爲め書いた宣傳文を、大學生のダヰーヂェンコに渡し忘れた事も想ひ出した。

醫師は再び麥酒を注いだ。併てチージュは急に何もかも忌はしくなつた。醫師も、麥酒も、寢惚け顏をしたボーイも、太陽の下で泰平らしく假睡んでゐる消防隊の庭も……

彼は立上つて手を差し伸べた。

「あなたはつまり寢坊なんですよ醫師、それつ切りですよ！」

彼は兎に角最後の一言を、自分の物として別れるのが快かつたのである。

アルノルヂイは何とも答へないで、例のどんよりした利口さうな小さい目を一寸彼の方へ振向けたばかりである。その目の奥の方に、何か皮肉な或物がちらと閃めいた

が、それは非常に纖細で稻妻のやうに早かつたので、チージュはまるで氣が付かなかつた。

小柄な大學生が再び並木街を走り出した時、アルノルヂイの四輪馬車が彼を追越した。肥つてどつしりした醫師が小さな腰掛に座つて、兩手で杖に凭れ乍ら居眠りしてゐるらしかつた。重々しい雲の樣な埃が車輪の後ろに舞ひ上つて、長い間靜まらなかつた。

『それでも感心に病家へ廻つてるわい！』とチージュは機械的にかう考へたが、患者が皆一樣に口を揃へて此醫師を賞めるばかりでなく、優しい愛情を以て彼の噂をする事を想ひ起して、彼は和睦する樣な心持でかう斷定した。

『不幸な人間、もう將來の無い畸人だが、併し世間の多くの者よりは勝れた人だ！』

三

チージュは彼方の隅から此方の隅へ歩き廻り乍ら、自暴に太い卷煙草を飲んでゐた。

それは窓の一つしかない、小さな息苦しい室で、壁はまるで唾でも吐き掛けた様に汚かつた。此の廣い商家の中でも一番惡い室を敎室に定められたのが、チージュは癪に觸つて堪らなかつた。それが爲めに彼は此の無恰好な石造の家も、魚や木脂の一杯塡つてゐる倉庫も、沒趣味な維納式の家具も、窓に載せられた鉢植の花も、魚と銅貨の匂の浸み込んだ、足が短くて腹の大きい主人夫婦をも、眞底から輕蔑してゐるのであつた。

開け放した窓からは空氣の代りに、魚や木脂の腐つた樣な匂がむん〳〵と流れ込んで來た。堅固な倉庫で取圍まれた廣い庭の中は、まるで市場の樣に騷々しくごちやごちやして居た。逞しい挽馬は無器用らしくのろ〳〵と動き廻つてゐるし、巨大な荷車や、馬方や、轅や、樽や、魚の一杯詰つた四貫俵や、かう云ふものが雜然と入亂れてゐた。罵詈、叫聲、轟音は庭の上に立迷うて、空氣さへ如何にも窮屈らしく、丁度油の差してない大きな車輪か何ぞの樣に、埃と苦熱の中をぎし〳〵と軋み乍ら、身を動

かして居る樣に思はれた。

希臘語や、物理學や、地理などゝ首つ引をしてゐるチージュはかう云ふ所へ來ると、まるで土と肥料の匂のぷん〳〵する、素張しく大きい丈夫な蕪の中へ食ひ込んだ虫けらと同樣、小つぽけな、緣遠い、而も妙に毒々しい物のやうに感じられた。

彼は神經的に煙草を吹かし乍ら、毒々しげに窓の外を覗いた。そして外の轟音を壓倒しようとでもする樣に、細く鋭い聲を張り上げつゝ、譯讀をするのであつた。

『レオニドス一世（紀元前四九一年——四八〇年）は三百のスパルタ兵を率ゐて、テオモピルの峽谷を占領した……』

彼はくつきり際を立てゝ刈込みをした薔薇色の二つの襟頸や、仔豚の樣に透き通つて、びんと突つ立つた耳などを、さも憎々しさうに眺めてゐた。彼の顏は蒼白く窶れて、口の兩隅には老人めいた氣難かしい皺が寄り、額の上の雞冠のやうな髮は、濡れてぐつたり垂れて居た。

子供等の汚い指についてゐるインクの汚點希臘語、餘計者の樣な自分自身の聲、これ等すべての物が矢も楯も堪らぬ程飽き〳〵して、理智の進んだ野蠻人とも云ふべき創造的な好戰の生活を送つて居た希臘人などは、此の汗臭い商人の家に取つて何の緣もゆかりも無い、隨つて自分等は木脂や魚より、ずつと惡い室を當てがはれたのだと云ふ事を、はつきり意識した譯ではないけれど、いやになる程明瞭に直覺したのである。

やがて時が移つたなら、此の薔薇色をした襟頸もいやに脂ぎつて來て、牡牛の樣な肩の上にがつしりと載るだらうし、透き通つた耳も猪の樣に肉が付いて渦を卷き、インクに汚れた指も油染んで、ごつ〳〵した拳に變るだらう。其時は文明の保持者であり、人類の未來の光榮の空想者たる古希臘人も、かうした腹の突き出た、額の低い、意地の惡い動物が自分の子孫だとは、到底信じる事が出來ないに相違ない。

外の轟音を厭倒しようと努めてゐる、チージュの引つ千切れた樣な聲は、まるで誰かに哀訴するやうであつた。

彼は生徒の後ろへ立寄つて、肩越しに其の手帳を覗き込んだ。その中には浸染み勝ちな金釘流の字が、貧弱さうに汚らしく這ひ廻つて、鮮明な生きた人間の言葉は見分けられない位であつた。

『まるで利口な猿が書いたやうだ！』とチージュは嫌惡の念を覺え乍らかう考へた。

誰やら戸を叩く者があつた。

「お入りなさい」とチージュは應じた。

生徒等の姉が顏を覗けた。柔かい灰色の目に、ふつくらした無邪氣さうな唇を持つた可愛い娘であつた。

「入つて宜しうございますか？」と訊ね乍ら、彼女は返事を待たないで入つて來た。

「何卒」とチージュは齒と齒の間から押し出す樣に、打つ切ら棒にかう言つて、矢張り授業を續けて居た。

彼は此娘の訪問を好まなかつた。それに全體として此の娘が嫌ひだつた。それは只

彼女が商人の娘だと云ふ事一つ丈で充分であつた。チージュはすべて商人が憎くて堪らなかつたのである。彼は此娘が此の家の中でも　まるで他家の人の樣に見える事に氣が付かなかつたのである。尤も子供達を中學校へ入れる樣に主張したのは、外でもない此娘だと云ふ事は、彼も承知してゐた。

乾度彼女は子供等にいきなり商賣の方をやらせようと云ふ父親に反對して、長い間根氣强い戰ひを續けたに相違ない。で今彼女は自分に責任が懸つて居る樣に感じるものらしく始終教室へやつて來て、靜かに窓の傍へ座を占め、白い丸々した手で頰杖をついて、物思はしげに廣い庭をじつと眺め乍ら、幾時間も幾時間も此の息苦しい、退屈な教室に座り續けるのであつた。何の益も無い此の無言の監督はチージュの心を苛立たせた。彼は憎惡の念を以つて娘を見遣つた。

『畜生！お前なぞは極普通な百姓娘になつて、跣足で畑を歩き廻つたり、刈入れをしたり草取りをしたりし乍ら、誰か頑丈な若い衆に首つ丈惚れ込む位が相當してる。そ

して頭髪の周りをぐるりと剪つて、それに鐵の櫛でも差して、繩の帶位しめてれば澤山なのだ』と彼は腹の中で考へた。『田舍に居れば丁度身分相應で丈夫な娘、よく働く女、よく子供を生む女房として立派なものだ。それがまあ何うだらう……馬鹿々々しい、何の爲めか知らんが女學校なんか卒業して、小說を二三十冊讀んだ爲めに、却つて自分で自分を何う始末していゝか分らないで、厄介な寄生虫となつて了つたのだ。今に木脂の樽みたいにぶく〳〵脹れるんだらうよ……仕樣の無い馬鹿女だ！』

奇妙な事であるけれど、彼女の灰色の目が何とも言へない程無邪氣で、生き〳〵とすんなりした頸筋が心持日に燒けて居り、唇が白い齒の上に可愛らしく抬つて居る爲めに、チージュは却つて餘計に苛々して來るのであつた。

子供等が鼻汁を啜つたり、倚子の上でもぞ〳〵身を動かしたり、墨汁で手を汚したりしてゐると、チージュは彼方の隅から此方の隅へ歩き廻り乍ら、煙草を吹かしたり癇癪を起したりしてゐた。けれど娘はじつと窓際に座つた儘、無邪氣な優しい灰色の目

で空を眺めてゐた。何か物を考へてるか何うか、それさへ分らない位であつた。

中庭ではもう最後の荷馬車が出拂つて了つて、まるで木陰の深い庭園に面した通風口でも開けた樣に、何處からともなく新鮮な空氣が流れ込んだ。到頭チージュは時計を眺めてかう言つた。

「いやもう澤山……」

子供等は急に生き返つた。汚い手帖は何處かへけし飛んで了つて、卓の上には見る見る墨汁の海が出來た。すると直ぐに一匹の馬鹿な蠅が其の中であえ無い最後を遂げた。兄の方は窓から外へ飛び出したが、弟は何か訊かうとしたけれど、只愚かしく口をぽかんと開けた丈で、從順しく戸の外へ引つ込んで了つた。チージュは自分の書物を集めて、青い革紐の附いた古帽子を取り、依然として物思はしげに窓際に座つてゐる娘の傍へ寄つて、暇を告げた。

「左樣ならエリザエータさん」と彼は言つた。

娘は緩々と手を差し伸べて、晴れ〴〵しい目を擧げた。と驚いた事にはその目の中に、何かしら奇妙な表情が浮んでゐた。娘は何か訊き度いと思ひ乍ら、それが思切つて口へ出せない樣な風付なのであつた。顏には紅の色さへさして、其爲めに彼女は急に一層可憐らしくなつたのである。

「あなたもうお歸りでございますの?」と彼女は訊いたが、それは腹で思つてる事とは全然別な事らしかつた。彼女は又餘計赤くなつた。

「えゝ」チージュは幾分驚いてかう答へた。が直ぐにむつとなつて、「まさか此處で泊る譯にも行くまいよ!」と考へた。

かうした娘らしい内氣な態度は、此のよく肥えて落付いた女の中に、何事かを空想し何事かに興奮してゐる、若々しい少女が存在してゐる事を示して居たけれど、彼はそんな事に少しも興味を持たなければ、又動かされもしなかつた。チージュは只愚圖々々と引留められるのが、忌々しくて堪らなかつた。彼は矢も楯も堪らないほど外の

新鮮な空氣が吸ひ度かつた。朝早くから始つて、やつと太陽が西に沈んだ後、曠原から黄昏の氣が迫つて來る頃に濟む出稽古の疲れを、少しでも休め度いと思つたのである。

『事に依つたら俺に惚れてるのぢやないかな?』小柄な大學生は嘲る樣にかう考へた。と彼女の壯健で新鮮な肉體に對する露骨な想像が彼の心中に湧起つた。

「私あなたにお訊ねし度い事がありまして」と娘は急き込み乍ら言ひ出したが、突然落付いた無關心な調子で語を結んだ。「あなたはミハイロフさんとお知合ですか?」

「知合ですよ」厭な薄笑を浮べ乍らチージュは答へた。そして心の中で、『此の娘も矢張り同じ樣に……仕合せな男だなあ!』と考へた。

併し娘は對手の厭な薄笑ひに氣の付かない樣子で、手を擧げて頭髪を一撫でした後、澄んだ無邪氣な灰色の目でじつと彼を見詰め乍らかう言つた。

「あの方は一風變つた面白い人だと云ふ話ですが、本當でございますか?」

「一風變つた人なんか有りやしません、よし有るとしても此の町ぢやないですよ!」チージュは腹立たしげにかう答へた。

「だつてそれにしても……」

「そりや何と云つても畫家ですからね……新聞でも才能のある藝術家とか何とか書立てゝゐます……それに黑い目をして、立派なドン・ジュアンでさあ……」

「ドン・ジュアンですつて?」物思はしげは娘はかう繰返した。

チージュは突然恐しく獰猛な勢で、

「勿論田舍のお嬢さん方に取つてですよ!あんなドン・ジュアンなぞ此町に掃いて棄てる程有ります!何處の電信局へ行つてもちやんと控へてゐますよ……此連中にはもつと適當な名前が露西亞語にあります——女たらし!餘り美しくないですが、併しよく穿つてゐます!」

「所で或るお嬢さんがあの人の爲めに、拳銃(ピストル)で自殺したと云ふのは本當でせうか?」

娘は穏かな調子でかう訊いた。

チージュはすつかり前後を忘れて了つた。

「そりやあの男の爲めかも知れません……併し僕の知つた事ぢやありませんよ。エリザエータさん、退屈で困つてゐるご婦人方を慰める爲めに、市中の噂話を集めたりするよりか、もつと面白い仕事がありますからね。世の中に馬鹿な女は少くないですよ！……極簡單な事でさあ。失禮な言ひ方ですが、女に子供を孕ませて了つて、後足で砂を懸けたんです……本當に仕樣のない豪傑連ですよ！外に仕事はないんですからね……尤もあんな連中なぞは何うだつていゝのです！……左樣なら」突然チージュは言葉を切つて了つた。

彼は戀の悅びに渴してゐる、此の暢氣で健康な娘を始めとして、罪のない田舍令孃を誘惑するより外能のない、すべてのいゝらくら男どもを脅し付けて侮辱する爲めに、殊更無作法な言葉遣ひをしたのである。若し彼にもつと勇氣があつたなら、もつと〳〵無作法な言ひ方をしたかも知れないのだ。彼は娘が極りを惡がつて、侮辱を感じるだらうと待設けてゐたが、彼女は只心持圓々した肩を縮めたばかりで、物思はしげな灰色の目を据えて、平然と彼の顏を見詰めながらかう言つた。

「ですが、あなたはあの人がお嫌なんですね！……左樣なら」

「ご免なさい」チージュは腹立たしげに娘の手をぐつと引つ張ると、まるで怒つた雀の樣に室を飛び出した。

娘は夕燒けの光りに鮮かに燃え始めた空を眺め乍ら、叉暫く窓の傍に座つてゐた。やがて立上つて二足歩き出したが、突然薔薇色の肘をした圓つちい兩手を頭の後ろへ延して、さも惱ましげに長い間伸をした。無邪氣な灰色の目は心持閉ぢられて、下つた睫の下に奇妙な狡猾らしい光がちらと閃いた。がそれも直ぐ消えて了つて、娘は手を下すと其儘室を出て行つた。

四

醫師のアルノルヂイは重々しく杖に倚り掛り乍ら、内庭へ入つて行つた。

どつしりした偉大な彼の體は、まるで量り知れぬ程重い荷物を擔いでゝもゐる樣に、さも疲れたらしく地の上を引摺る樣に動いて行つた。彼の曲つた背中にも、大きな重々しい頭蓋にも、過ぎ去つて了つた生涯と、眞底まで滲み込んだ深い疲勞とを物語る樣な、悲愴な或物が窺はれた。まるで彼は小さな内庭を横切るのでなくて、永久の猶太人の樣に、終りもなく意味も無く、又晴れ〴〵しい休息の喜びもなく、目的のない旅を何時迄も〳〵續けなければならぬのではないか、と云つた樣な感じがするのであつた。皮膚のたるんだ脂ぎつた顏には、無關心より外に何等の表情も見えなかつた。此無關心の中には憂愁も、希望も、悔恨も、何一つ容れる餘地が無ささうであつた。自分の小舍の傍に鎖で繫がれて、悄然と座つた居た老犬は、醫師のアルノルヂイを見た時、只一寸體を搔いて鎖を鳴らした丈である。大方毎日醫師を見馴れた爲めに、もう疾うから此の歩みの鈍い肥つた委を、人生に於いて何等の意味をも持たぬ事物の中

に、編入して了つたものらしい。

内庭は少さく小ぢんまりし居て、遠い太陽が鮮かに其上を照らしてゐた。前栽は愛と忍耐とを以つて作り上げたらしく、華やかな友禪模樣に染め分けられて居たが、花はみな埃を被つて、折られたり踏み躙られたりしてゐた。それは丁度巨人が此の家を目懸けて恐しい襲擊を試みながら、重々しい足で踏み荒らしかの樣であつた。丁度入口の階段の傍に、殺風景な黑い色で塗られた倚子形の便器が、通り路の邪魔をし乍ら立つてゐた。その圓い孔は人を馬鹿にした恥知らずの顰め面のやうに、露骨に無作法に口を開けて居た。醫師アルノルヂイは機械的にその方をちらと見遣つたが、別に立止りもせず階段を上つて行つた。

戸には鍵が懸つてゐなかつた。醫師はそれに馴れて居たので、自分で戸を開けた。堪らない程息苦しく熱い控室には、誰一人客を出迎へる者も無かつた。醫師はのろ〳〵した手付で釘に帽子を掛け、片隅へ太い杖を置いて奥へ入つて行つた。幼稚な古めか

しい客間は、憎げな沈默と埃の匂ひを以つて彼を包んだ。何處へ行つてもひつそり閑として、まるで一切の者が死に盡したかの樣であつた。只一匹の大きな蠅が、何故か意地惡さうに圓い卓の上に圈を描いて、その脅す樣な惱ましげな唸り聲が、家ぢうに響き渡るのであつた。

醫師のアルノルヂイは次の間を覗いて見た。其處にはたつた一つしか窓が付いて居ない上に、隣の家の壁が外廊下に面してゐると見えて書物卓も安樂倚子も、厚い本の入つた埃だらけの書棚も、柔い薄暗の中に沈んでゐた。何かしらぼやつとした物の影が室の隅々に浮游してゐるやうに思はれた。ぼんやり白く見える窓を背景にして、胡麻鹽の禿頭が黑く影繪のやうに浮き出してゐた。此頭は安樂倚子の中に深く沈み込んで、兩手の中に顏を埋めて居た。

「イヴン・イヴーノヂッチ！」アルノルヂイは闕の上に立つた儘、餘り大きくない聲でかう呼んだ。

頭はびくりともしなかつた。疎らな胡麻鹽の毛は心細く日光を透かして、骨と皮ばかりに痩せた細い指の上には、死人の樣な青み掛つた光がちら〳〵して居た。

「イヴン・イヴーノヂッチ！」稍大きな聲で醫師はもう一度かう呼び掛けた。

後頭部が死人の樣に骨張つて、じつとした儘少しも動かない人間の頭からは、息窒る樣な靜寂の氣が發散してゐる樣であつた。そして其中には何かしら恐しい、死の樣な或物が感じられた。併しそれは未だ死ではなかつた。何故と云つて、醫師のアルノルヂイがじつと目を見定めた時、憐れな胡麻鹽の毛が禿げた頭蓋の上で、呼吸の爲めに微かに動くのが目に入つたからである。醫師はほつと溜息をついて、思切り惡さうに悲しげな室を出て行かうとした。と次の間でせか〳〵とした小刻みな足音が聞えて、顏付をした小柄な白髮の婦人が客間へ入つて來た。

「あゝあなた、先生でございましたか！」と言ひ乍ら彼女は薄暗い室の中を見透して片手を振つた。

「矢つ張り同じ事ですか？」醫師のアルノルヂイは訊ねた。

老婦人は又もや片手を振つた。限り無い憂愁と疲勞とが、此の老人らしい身振の中に感じられた。けれども彼女は矢張り安樂倚子に座つて居る老人の傍へ寄つて、一寸その肩に觸つた。

「あなた、先生がお見えになりましたよ……」

頭は動かなかつた。

「先生がお見えになりましたよ、あなた」と彼女は繰返した。

頭はふら〳〵と慄へ乍ら動いて、剃刀の入らぬ胡麻鹽の髪で蔽はれた顔が此方へ振向いた。そして涙の滲んだぼうッとした視線が醫師の方へ注がれた。

「あゝ！」まるで呻き聲のやうな、殆ど聞き取る事の出來ない位な聲が響いた。そして病人は拐ぎ離す樣な身振りで、慄へ乍ら急いで起上らうとした。

「座つておいでなさい、座つて」と醫師のアルノルヂイは言つたが、白髪頭のイヴン・イヴーノヰッチはもう衰へて果てた、關節の曲らぬ足で立上つた。そして半ば死んだ樣な彼の顔は、客を迎へる微笑の爲めにひん曲つてゐた。此の微笑は恐しかつた。その中には何うする事も出來ない絶對の無力と、自分の衰弱や醜惡に對する、憐れな老人らしい羞恥と鬪ふする、以前の理智的な禮儀心の苦悶が表れて居た。それは眞に魂を震拭させる樣な悲劇であつた。

老婦人はそつと彼の手を取つた。すると古びた黑いフロックコートの中でふら〳〵して居る、瘠せた骨ばかりの體が、顚へながら客間の中へ入つて來た。それは解剖室から取り出した古い骸骨が、嚴めしい大學教授のフロックコートを着て歩き出したら、かうもあらうかと思はれる樣な、慘酷な滑稽味を帶びてゐた。

彼は安樂倚子に腰を下した。肥えて大きな醫師はその前にどつかりと座つて、注意深く眞面目に診察した。

「ご氣分は何うですか？」

イヴン・イヴーノヰッチは又しても濟まない樣な、憐れげな微笑を洩した。
「何うもかうも有りません。不可ないです」
「食慾はありますか？」
「まあ普通ですな……よく食べますよ」
「何がよくでせう！」小柄な老婦人は愁はしげに手を振つた。
「なぜ、何う云ふ譯で……私はよく食べるぢやないかと……」老人は突然腹を立てた。
そして彼の聲は子供が怒つた時の樣に慄へを帶びて來た。「現に今日なども肉汁も飲んだし、それからあの……何とか云つたつけ……なあ、ほらあの……春の初めに花の咲く……」
醫師のアルノルヂイは怪訝さうに老婦人を見遣つた。
「苺ですよ」と彼女は口を添へて、極り惡さうとも付かず、苦しさうとも付かぬ微笑を浮べた。

「あゝさう……苺だ」と老人は言ひ直して、これは只ひよいと偶然間違つたので、こんな事など少しも氣にはしない、と云つた樣な心持を見せようと努め乍ら、膝の上に置いてゐる痙せた手の指を、長い間ぼんやり動かしてゐた。
醫師のアルノルヂイは無言の儘、試驗するやうに彼を眺めてゐた。それは丁度彼の體內で、老ひさらばうた人間の內臟が破壞され、神秘な死の作業が着々と進行し、腦力が消滅し、視力が減退し、嘗ては熾に鼓動してゐた心臟が、老ひ疲れて靜かに止つて行くのを、じつと觀察して居るかの樣であつた。此時彼はふと、以前學生時代に始めて顯微鏡で、腐敗し掛つた組織體の中に生きてゐる有機物を、觀察した事を想ひ出した。奇妙な虹の樣な光で彩られた顯微鏡のレンズの中で、何やら或物が恐しい速度を以つて廻轉し乍ら、次第に其の物狂ほしい運動を早めて行く樣が彼の注意深い、とは云へ驚異に打たれた目に映じた。それは獨自の樞軸を中心として廻轉してゐる、一つの小さな世界であつた。彼は何故か胸の窒る樣な氣がして、此の恐しい微生物の運動

を留め度くなつた。遂に半澄明の小さな虫がレンズの下で、利口さうに生き〳〵と動き始めた時、アルノルヂイは恐しい樣な、嬉しい樣な、悲しい樣な心持がした。ついに一分間前まで死より外何物も無かつた所に、忽然として生きた虫が——たつた今の今まで何處にも存在しなかつた虫が現れるとは……。彼は自分の心持を傳へる事も出來なければ、それを說明する事も出來なかつたけれど、其中には何かしらもつと大きな物が潛んでゐた。それは彼自分の生活から、急に一切の意義を奪つて了ふ程の、恐しい力を持つたものであつた。其晩學生のアルノルヂイは外へ出て、死人の樣に醉ひ潰れたのである。

「時に何か面白い話はありませんか？あの、それ何と言つたか……あれですよ？」不意にイヴン●イヴーノヂッチは話し掛けた。視力の鈍つた涙つぽい目は、奇妙な不自然な活氣を帶びて醫師の方へ向けられた。

「何ですか、別に面白い事なぞ有りませんよ、何も彼も舊態依然たりです」醫は師妙に

むづかしさうに、矢鱈に言葉を分け乍らかう答へた。

彼は出來る丈自然に素直に返事をして、有觸れた下らない話を始め度かつた。つまり皆が健康な人に對するのとは違つた態度を取ると云ふ事を、病人に感じさせまいが爲めであつた。けれど言葉が思ふ樣に口から出て來ないで、聲はいやに緊張したわざとらしい響を帶びた。老人が屹度理解して呉れると云ふ確信はなかつたけれど、それと同時に彼の間に答へないのも空恐しく感じられた。何と言つても彼は古い大學教授で、その名が何等の痕をも留めずに消え去るべき人ではなかつた。彼の著書は嘗て當の醫師アルノルヂイにも、人生を理解する事を敎へて呉れたのである。

「何もありませんか？」とイヴン●イヴーノヂッチは繰返し乍ら、何となく信じ兼ねる樣に考へ込んだ。

醫師のアルノルヂイはじつと對手を眺め乍ら、次を待つてゐた。けれどイヴン●イヴーノヂッチは突然苛々と周章てげに身を動かし始めた。

「何かご用ですか、あなた？」忠實な愁はしげな目を、良人から離さずにゐた老婦人は、かう訊いた。

「何うだね、皆で醫師と一緒に……あれを食べようぢやないか……そら何と言つたかな……はる……はじめ……」老人は記憶を呼び起さうと恐しい努力をしたが、如何にも濟まぬ樣な、憐つぽい目付で醫師を見やり乍ら、思切りの惡い聲で語を結んだ。「きつねだつたね？」

次第に硬化して行く腦髓を支配しようと、空しい努力をしてゐる彼の瀕死の老體が、何んなに深い憂愁と惱ましい疑惑に充ちてゐるかは、察するに難くなかつた。彼の樣子を見てゐると痛ましい樣な、胸苦しい樣な、可笑しい樣な氣持がして來るのであつた。醫師の肥えた顏を病的な痙攣が走つて通つた。

「苺ですよ」と又老婦人が口を添へた。

「あゝさう……」目を上げて醫師を見乍らイヴン●イヴーノヰッチは、言葉に盡されぬ

苦惱と哀願の表情を浮べてかう言つた。「御覽なさい、記憶がこんな有樣になつて了ひましたよ！」

「記憶なんか言つてる場合ぢやありませんよ！」忌々しいとでも云ふ樣な聲で老婦人は抗辯した。「只あなたが病氣して熱が有るから、それで記憶が弱つたのですよ。今によくおなりになりますよ」

「あゝ何を言ふのだ！」苛立たしげに老人は叫んだ。「何のよくなるものか……私だつて子供ぢやないからな！」それから哀愁の色を浮べ乍ら、醫師の方へ向いてかう附け足した。「私もこんなになる迄生きてゐようとは思はなかつたですよ！」

長い惰い沈默が襲うた。又しても大きな黑い蠅が卓の上で、無氣味にぶん〳〵唸る音が靜寂の中に聞え始めた。そしてまるで空氣が足りないのかと思はれる程、息苦しくなつて來た。イヴン●イヴーノヰッチは禿げた頭を手で支へ乍ら座つてゐた。此の頭の中で貧しく弱々しい人間の思想が、惱ましく恐しく廻轉して居るのが感じられた。

それは將に永久の暗に消えなんとしてゐる、一點の頼りない火の樣な物であつた。醫師のアルノルヂイは此の思想を最後まで追窮して、一刻毎に死へ近付いて行くと云ふ事を確かに知つて居る人間が、果して何んな感じを抱いてゐるか、たつた一度丈でも突き留めようと努力する樣に、無言の儘彼を見詰めてゐた。

老婦人は立上つて、そつと醫師に向つて後から從いて來る樣に小手招きした。

二人は音のせぬ樣に次の間へ出て、其處に腰を下した。瀕死の病人はたつた一人取殘された。

「もう四ケ月と云ふものあの通りなんですからねえ！」老婦人は悄然と絶望した樣な聲で言ひ出した。「一體何うしたのでせうねえ先生？」

アルノルヂイは弱々しく肩を竦めた。

「何うも仕方がありません……人間の壽命は限りのあるものですから……」疲れたやうな調子で眞面目に彼は答へた。

「いえ、それは私も承知して居りますけれど……併し何うしてあんな風なのでせう？眠る樣に息を引取つて、それきり歸つて來なければ宜しいのにねえ、あの人の苦しみ樣はまあ何うでせう！先生、良人も自分でよくそれを承知してゐるのですが、只口に出して言はないばかりなのでございます……ねえ先生、自分の近しい人が死ぬと云ふのは、それはもう恐しい事に相違ありません……何にせよ私達は四十二年の間、一緒に暮して來たのですからねえ……けれど私は何んな事でも辛抱致しますが……何より恐しいのは、じり〳〵死んで行くと云ふ事でございます……私には何うしてもこれが巧く言へませんけれど、あなたは察して下さいますでせうね……自分の近しい愛する人が段々……なにになつて行く姿を見るのは、何といふ情ない事でございませう……あなたまあ考へて見て下さいまし——良人は此頃方々の店を馬車で乘廻つて、何や彼や買物をすると云ふ癖が出來たのでございます。あの手代共の妙なにたり〳〵笑ひ、知り人の痛々しさうな目付……あゝ堪りません！私は以前若死する人達を氣の毒に思つ

て、良人が充分年を取る迄生きて呉れる様にと、よく神様に祈つたものですが、今想ひ出すと不思議で堪りません……何と云ふ馬鹿々々しい無意味な祈りだつたでせう！お分りになりますか、私はこれを想ひ出すと不思議な氣が致しますの！ねえ、何と云ふ恐しい事でせう……いえ、私は巧く口で言へません！……」

「よく分ります！」と醫師のアルノルヂイは靜かに答へた。

老婦人は强く、殆ど痙攣的に皺だらけの手を握りしめ乍ら、じつと据わつた目で長い間眞直に前の方を見詰めて居た。

「あゝ、一體あゝした苦しみが誰に必要なのでせう！」と彼女は獨言の樣に言つた。

「分りませんなあ……」反響の樣に機械的にアルノルヂイは答へた。

此の言葉の後に襲うた沈默の中で、目に見えぬ何者かの翼が、嚴かにはた〳〵と搏つてゐる樣に思はれた。

やがて老婦人は蜘蛛の巣に掛つた蠅の呻きに似た、弱々しい聲で又言ひ出した。

「先生、私は疲れました！……そしてこれが誰にも分らないのでございます。けれど私だつて人間でございます……私の力にも限りがありますからねえ！……」

彼女は誰一人として、自分の恐しい哀しみを理解して呉れる者がない、といふ事を訴へるのであつた。それは何等の希望も光明もなく、毎日々々半分死骸の樣な人と暮し乍ら、嘗ては世界中でたつた一人切りの、何よりも大切な存在物として、自分の生活全部を充して居た人が、次第に腐敗分解して行くのを、目の當りに見るべき運命を荷つた女の悲しみである。これは何んなに慘酷な人間でも、嘗て考へ出した事のない恐しい拷問であつた。生きた人間を死骸と一緒に棺の中へ入れた儘、何時までもそれなりに打つ棄つて置いて、死體が次第に腐爛して行つて、脂ぎつた蛆虫がその上を這つたり、膿が流れたりする樣になり、頭蓋骨が露出して墓穴の暗の中でにた〳〵笑ふのを、じつと眺めさせるのに同じである。如何なる言葉を以てしても此の恐しさを完全に言現して、他の者に理解させ同情させる事は出來ないであらう。

彼女の悲しみは深刻で眞劍であつたが、不思議な事に醫師のアルノルヂイは、彼女が何か言ひ殘してゐる樣な氣がした。人が彼女に同情を表しても、亦何時も變らぬ無益な繰言に素氣なく顏を外向けても、彼女は同じ樣に腹を立てゝ苛々するのであつた。何かしら或物が彼女に必要なのであつた。それは彼女自身明瞭に意識しない何物かであつた。何よりも恐しいのは外でもない、死に行く人を哀惜する彼女の心持は隨分痛切で、近い中に來るべき最後の事を想ふと、心臟に血が充ち溢れるのであつたけれど、疲れ切つた肉體と苦しみ拔いた精神とは、靜養を欲してゐるのであつた。

此の二つの物は何時とはなしに彼女の意志に反して、病人が早く死んで自分を休ませて呉れる樣にと、要求するのであつた。で彼女は此の心持を恐れて、そんな事は有るべき筈がない、自分は病人の傍へ一人切り置いてきぼりにされるのが苦しいのだと、大急ぎて自他に辯解するのが常であつた。

「何より一番辛いのは逃れ道が無いといふ事ですの、先生……逃れ道が！」

「逃れ道は何時でも有ります」アルノルヂイは疲れたやうにかう言つた。「此世の中の事はすべて兎まれ角まれ、終りがあるからいゝのですよ……遲かれ早かれ」

老婦人は慴えた樣な目付で、年取つた役者のやうに無興味な、たるんだ醫師の顏を見遣つた。

「えゝまあ……それは私も知つて居ります……」恐しい一言を云はすまいと思つて、彼女は周章てゝかう言つた。「何も彼も終りを告げます……けれどあゝした苦しみは何の爲めなのでございませう？」

「知りません……」依然として簡單に醫師は繰返した。

「私達が苦しむと云ふ事は……」

客間の中から弱々しい短い響きが聞えた。それはまるで毀れたバネが腹立たしげに軋む音の樣であつた。

「呼んでゐる！」何かしら妙な非難する樣な調子で老婦人は言つた。

「バリーナー！」と病人は呼んだ。

二人は立上つて客間へ赴いた。

老教授はフロッコートの廣い袖口から、力無げに突き出してゐる痙せた指で、安樂椅子の腕木を掴みながら、眞直に身を伸して座つて居た。彼は惚えた樣な疑り深い目付で、侮辱でもされた樣に二人を見詰めるのであつた。

「何うだね、足りる丈喋つたかね？」と彼は子供らしく意地惡な調子で訊ねた。

「私が話した事ですか？なに詰らない事ですよ、あなた……」老婦人は濟まぬ樣な聲で優しくかう辯解した。

イヴン・イヴーノヰッチは迂散臭さうに彼女を眺め乍ら、落込んだ口をもぐ〳〵させた。彼はみんなが耄碌した自分を冷笑して、もういゝ加減に死にさうな物だと、陰口を利いてゐる樣な氣がするのであつた。何か未だ其外に一番恐しい物が彼の心に閃いたが、弱つた腦にはそれが何であるか分らないので、只力無い孤獨な苦痛を苦しむよ

り外仕方が無かつた。

「其處に誰か居た樣だな」と彼は心配さうに言ひ出した。

「誰がゐるものですか。先生がいらしたのですよ……」

「先生？あゝ醫師あなただつたのですか……私は氣が付かなかつたですよ。ねえ醫師、あなたは昨日我々の會の集りにお出でになりましたか？何といふ馬鹿者達でせう！何時も〳〵不死の議論ばかりしてゐる……まるで私が頼みでもしたかの樣に！あなたは何うお考へです？」

「あなた何を言つてらつしやるのです？」と老婦人は辛さうに訊ねた。

併し老人はそれには耳も假さないで、充分意識の働いてゐる樣な興奮した目で、眞面目に醫師を眺め續けた。黑い霧が彼の腦の中へ下りて來て、衰へた思想は遠い過去を現在と混亂さして、一生懸命に跪いてゐるのであつた。それは丁度霧の深い海の中で方向を失つた鳥が、落ちたり又飛び上つたりするのに似てゐた。

「若し皆が望むなら、私は此の儘の姿で往來へ出てやるよ。みんな勝手に見るがいゝ……嘸いゝ恰好だらう？え？……これは中々面白いでせう醫師？」

「さう、それは非常に結構です」と醫師のアルノルヂイは落付き拂つて同意した。彼の顏の表情は全然無關心であつたが、それ丈に猶彼の言葉の企まざる皮肉が恐しく響いた。

「ちやいゝんですな？」と老人は繰返して、醫師に目交ぜをし乍ら、勝誇つた樣に笑ひ出した。それは彼が自分の唯一の腹心で、自分が何んな狡計を思ひ付いたかと云ふ事を、ちやんと察して居る物の樣であつた。

「全くいゝですよ」

醫師は一見した所何の無味もない樣で、その實恐しい意味に充ちた、此の混亂した囈語を、一心に理解しようと努めた。嘗ては總明で敏感で、思慮に富み、自分の思想に誇を抱いてゐた人間の廢墟を、じつと眺めてゐるうちに、生きた精神の最後の火花

が其の內部で、力なく消えて行くのが感じられた。彼は人間の不死などゝ云ふ考へが、如何に愚れな空想であるかを悟つた。神とか死後の生活とか、宇宙の魂などゝ云ふものは、素人上りの畫家が、黑い空虛を蔽ひ盡してゐる幕の上に塗りたくつた、無器用で滑稽な畫の樣に思はれた。そこには次第に腐爛して行く肉體、燃え盡きて行く蠟燭の外何物も無かつた。頭腦が働き、肉體が完全な生活を營んでゐる間こそ、宗敎を論じ不死を信ずる事も出來るけれど、今一箇の人間が單なる瀕死の動物、內臟と脆い骨の塊に化して行くのを、眼前に明瞭に見せ付けられた時、さう云ふ思想は鬼や化物の昔話と同じ位、滑稽に馬鹿々々しくなつて了ふのであつた。

老人は力ない首を兩手の上に垂れ、目を閉ぢ乍ら考へ込んだ。

醫師のアルノルヂイはもう歸らうとしたが、其時突然イヴン・イヴーノヂッチは頭を擧げて、意識の籠つた目を眞面目に据ゑてかう言つた。

「あゝもう少し力があつたらなあ！只ぽつちり、ほんの一週間丈でも……只休息する

丈でいゝのだ……一切の事を思ひ出す丈でいゝのだ。手が慄へないで足が立ちさへすれば……私は門の外へ歩いて行つて、床几の上に腰を掛けるのだがなあ！……」

醫師のアルノルヂイは思はず微笑した。瀕死の病人の此の小やかな希望が、餘りに意想外だつたからである。彼は微笑した後で、門の外へ出て床几に腰を掛け度いと云ふ希望が、到底實現の出來ない及びも付かぬ空想となるとは、よく〳〵世界が狹くなつたものだと考へた。ふと何う云ふ譯かこんな事が醫師の心に浮んだ——若しバンテオンに埋葬されたナポレオンが何か希望を起し得るとしたら、彼は永久に胸の上に組合された手の指を、せめて一本丈でも動かし度いと空想し、泣いたり祈つたりするに相違ない。

と又もや老醫師のたるんだ顏を、痙攣が掠めて通つたのである。

老婦人は瞬きしない樣に骨折り乍ら、涙に充ちた目で見詰めてゐた。其目の中にはもう早く休み度いと云ふ隱れた希望はなくなつて、只限りなき悲痛な哀憐の情ばかり

が見えてゐた。

「ぢあバリーナさん」と醫師は立上り乍ら言つた。「別に變つた事はありません。續けてスペミンをお上げなさい……若し熱があつたらアスピリンをね……何うも外に……」

彼は老教授に別れを告げようとしたが、老人は慄へる禿頭を、骨ばかりの死人みたいな兩手の上へ傾けて、もう再び目を閉ぢてゐた。その垂れた瞼の蔭から如何にも老碌した樣な、惱ましげな涙が光つてゐる樣に、醫師には感じられたのである。

バリーナ・グリゴーリエヴナは醫師を見送りに出た。彼が帽子や杖を取つてゐる間に、彼女は又自分が疲れた事や、精も根も盡き果てゝ了つた事や、何も見ず感ぜず意識しない爲めに、地の中へ頭を突込み度いと思ふ事などを、くど〳〵と話し始めた。

彼等は二人ともすべての言葉——人間の舌の發し得る一切の言葉が、無益なものだと云ふ事を悟つたのである。此の時華美な服裝をした、肥つた、一見して姓振らしい一

人の婦人が、まるで挑む様な態度でつか〳〵と控室へ入つて來た。其後から洒落者らしい赤毛の將校が續いた。

「何だつておつ母さん、何時も愚痴ばかり言つてるんですの！」醫師のアルノルヂイと無造作に挨拶しながら、婦人は憤慨したやうな調子で聲高にかう言つた。「そんな事を言つたつて仕様が無いぢやありませんか。それはあなたの務ですもの。辛いんですつて？それぢや何うしようと仰有るんですの？」

老婦人は慴えた様な風付をした。苦勞が彼女を押し挫いで了つたのである……

「それやリードチカ、私だつて務めだつて事は知つてるけれど……それでも矢張り辛いからね」

若い婦人は曲のない投げやりな様子で手を擴げた。と、姙娠を隠す爲めにわざと廣く仕立ててあるレースの着物が、香水と若い健康な女の匂ひを、室ぢうへぱつと擴げるのであつた。醫師のアルノルヂイは恥しげもなく突出た大きな腹を、我ともなしに

思はず尻目に掛け乍ら、無意識的に惱ましい怪訝と羞恥の念を感じた——何うして人々はすべての者を待受けてゐる此恐しい最後を見乍ら、新しい人間の生命——換言すれば新しい苦痛を受胎したり、姙娠したり、生み出したり出來るのだらう？それ所かまるで偉大な使命でも果した様に、それを誇りとしてゐるではないか。裸體を暗示する様なけば〳〵しい着物にも、圓い固さうな腹にも、健康な若い男が執拗く彼女の後近く隨いてゐると云ふ事實にも、何かしら傲慢無禮に感じられる或物があつた。

『彼等は恐しい犯罪を犯してゐるのだ！』突然アルノルヂイの頭にかう云ふ考が浮んだがじつと踏み耐えて此の偶感を、最後まで徹底さす勇氣がなかつた。

「それにお母さん、何だつて玄關先にあんな見つともない物を、麗々しくお出しなすつたの？」姙婦は忌々しさとも付かず、媚態な冗談とも付かぬ表情で顔を顰め乍ら、半ば笑ひ〳〵投げ出す様にかう言つた。「幾ら何だつて、あゝまで無遠慮に擴げ立てるなんて……」

「一體何の事なの？」と老婦人は慴えた樣に訊ねた。

すつかり忘れて了つてゐるらしく、急には合點が行かなかつたが、やがて

「あゝ、そんな事どころかね！」と彼女は言つた。

醫師のアルノルヂイは華美に着飾つた姙婦を、重々しい目付で見送りながら、入口の上り段へ出た。もう中庭を歩いてゐる時に、恐しく打解けた朗らかな彼女の聲が聞えた。

「今日はお父さん！ご氣分は如何ですか？」

と急に憂愁と嫌惡の發作に打たれ乍ら、彼はかう考へた。『我々はみんな、みんな一人殘らず死ぬるんぢやあないか！』

太陽は明らかに輝いて、雀共は喧嘩でもしてゐる樣に騷々しく囀つてゐた。遠く家々の屋根や木立の上に、輕々した鐘樓の圓屋根が金色に光り、古い蛇腹の邊では鳩が銀色に閃いてゐた。

其時又もや玄關傍に置いてある黑い醜い器が、しみの樣に醫師の目に映じた。それは人間の排泄物の胸惡い匂に交つて、愚弄する樣な忌はしい死の呼吸を邊りへ擴げてゐるのであつた。

其處ですべての物が終つてゐた。遂に人生は一切の紛飾を棄てゝ、厚かましく裏面を引繰り返して見せた。そして今迄恥づべき物として、隅の方へ隱されてゐた物が、急に堂々と前の方へのさばり出て、大威張りで上席を占め、通り路の邪魔をし、美々しい花を押し倒してゐるのであつた。

醫師のアルノルヂイは立上つて機械的に杖を延し、忌はしい木造の怪物に觸つて見た。すると杖は鈍い音を立てゝ撥ね返つた。圓い穴は惡臭を放ちながら、嘲る樣にコバルト色の空を眺めてゐた。

醫師のアルノルヂイは杖を下して背を曲げ、靜かにそこを歩み去つた。

次の病家は隣の通りにあつたので、醫師のアルノルヂイは徒歩で出掛けた。いつも彼を病家廻りに曳いて行く牡馬は、並足でとぼ〳〵と後から隨いて來た。そして白つぽい頭をしたニキータはきちんと行儀よく馭者臺に坐つてゐたが、其樣子は醫師を倶樂部へ連れて行つたり、一人で水を取りに行くときと、すつかり同じ事であつた。

暑熱は未だ收らないので、往來は依然として埃つぽく夕暮の下に假睡んでゐた。窓の鎧戸は依然としてぴつたり閉されて、家々は古びた空虛な感じを帶びてゐた。此の家の壁の中で人間共がうよ〳〵蠢めいたり、笑つたり、接吻したり、泣いたりしてゐて、若しすべての家の屋根を一時に取り除けて上から覗いて見たら、一分間も休息を知らないで、物狂ほしく動き廻つてゐる蟻塚の樣な光景が目に映るかと思ふと、不思議な樣な氣持がする位であつた。ありとあらゆる隅々隈々に、苦しみ悶き乍ら自分の子孫を生んで、彼等をして更に自分と同じ苦しみを經驗させようとしてゐる、不幸な生物が蠢動して居て、苦しさの餘り醫師のアルノルヂイを呼び招くのであつた、丁度

彼が必然な運命を遁れる道を知つてでも居るかの樣に。

而も彼等の多數は今日苦しい努力に依つて死から救はれ乍ら、明日はもうう死んで行くのであつた。只一度餘計に同じ苦痛と、同じ死の恐怖を味ふのみである。醫師のアルノルヂイは自分の苦しい努力が、如何に無力で無意義であるかを、明瞭に曉つて居たので、もう久しい以前から別に興奮する事なしに、自分の義務を果すのに馴れて了つた。自分の治療が成功しようと、又は病人が自分の手の中で目を瞑らうと、醫師のアルノルヂイは何時も同じ樣に平然として、直ぐ次の病家へ出掛けて行つた。それは丁度時計屋が一つの時計を見終つて後、又別な機械に取掛るのに似通つてゐた。たゞ彼の頭は一日增しに重々しく、其顏は益々疲れた樣になつて來るのみであつた。

暑さの爲めといふより、寧ろ自分の肥大した體の爲めにはあ〳〵と喘ぎ乍ら、彼はとある耳門へ入つて、皮の臭のする小さな町人の家らしい中庭を通拔け、一軒の家へ入つて行つた。其處では彼の到着を神の如く、待焦れてゐるのであつた。

絶間のない心配の爲めに乾上つて、慴えた樣な顏付をした中年の女が、絶望した樣な目付で醫師を迎へた。此の見馴れた表情に依つて醫師のアルノルヂイは、子供が段々惡くなつて行くと云ふ事を悟つた。尤も彼はそれを豫期してゐたのである。市中では惡疫が流行して、死が家から家へ音もなく訪れて居た。そして未だ生の何たるやを知らない幼い者共が、最後の息を吐いて、小さなこつ〳〵の死骸と化して了ふ。それを幾十となく取集めて郊外へ搬んで行き、地の中へ埋めて了ふのであつた。其處には樅の若木が植ゑられて、綠の色が年と共と細やかになつて行つた。

「所で、何んな模樣ですかね?」何處へ帽子を置いたものかと邊りを見廻し乍ら、醫師のアルノルヂイはかう訊いた。

小さな汚い室は燒けた脂と石鹼の匂ひがしみ込んで、汚れた肌衣が到る處に山の如く積み上げてあつた。石鹼の泡の一杯付いてゐる盥の中からは、脂つこい甘つたるい湯氣がもく〳〵と天井へ昇つてゐた。悲哀と貧困とは襤褸布の一つ〳〵、塵の塊りの

一つ〳〵からさし覗いて、人生の大道を踏み外して零落した人々が、最後の力を失つて行く有樣を、さも滿足げに眺めてゐた。

「又不可ませんの、先生、又餘計不可ません!」何故か小さな聲で女はかう答へ乍らアルノルヂイの緩りした手の中から、帽子を機械的に取つて了つた。

「大丈夫ですよ、內儀さん氣を揉む事はありません……神樣のお惠みで何もかも巧く行きますよ」肥つた醫師は對手の顏を見ずにかう言つて、重々しく吐息をつきながら、薄暗い息苦しい室の閾を跨いだ。其中から死に行く幼兒の聞き馴れた、千切れ〳〵のしは嗄れた聲が聞えた。

此上で瀕死の幼兒が受胎し且分娩したものと思はれる、大きな羽布團の掛つた大形の寢臺の傍に、目のぎら〳〵光る若い町人が立つてゐた。彼は同じ樣に希望と恐怖に充ちた、熱病やみの樣な目付で醫師を迎へた。そして床の上に枕を落しながら飛んで行つて、醫師に椅子を勸めた。

アルノルヂイは重々しく寢臺の傍へ腰を下して、まるで氣力を集中しようとでもする様に、一寸考へ込んでゐたが、やがて小さな熱い手を取つた。すると其手は直ぐ本能的に搖ぎ放さうとして、力無く蹠き始めた。幼兒はどんよりした視力の無い目を、一寸心持醫師の方へ向けてぴくりと身を慄はすと、一層強く蹠き出したのである。梟の爪に掴まれた小さな獸の發する悲鳴の様な、やつと聞えるか聞えないか位の啼き聲が室に響いた。

醫師のアルノルヂイは手を放して考へ込んだ。彼には診察などの必要が無かつた。此の痙攣的な蹠き方や、どんよりした目の色や、呼吸の音などから推して、もう望みはないと云ふ事を察した。此上は只自分の良心の疾しくない爲めに、別に成功の目算はないけれど、思ひ切つて英雄的な方法に訴へる外はなかつた。

赤い斑點で蔽はれた、まるで雛子の様に華奢な小さい胸の中では、何やら切りに惱ましげに慄へて、ぴく〳〵動いて居た。それは丁度全身が痛みの爲めでなく、恐怖の

爲めに戰いて居るかの様であつた。他人の物の様に大きく見える頭は、骨無しの様に細い頸の上でぐら〳〵と搖れ、小さな顏は眼れて赤くなつてゐた。それは逞しい爪を持つた目に見えぬ手が、慰み半分の様に、不可解な慘忍さを以てゆる〳〵と、次第に強く、弱々しい小鳥の様な頸を締め付けてゐるかの様に思はれた。

「さう……」醫師のアルノルヂイは深い物思ひに沈み乍らかう呟いた。

「何うでございますか？」女は彼の方へ飛んで來た。

醫師は彼女の哀願する様な、慴えた様な眼を、重苦しい目付で見遣つた。

「變つた事はありません」と彼は言つた。「一つ熱い湯を用意して、スムスカヤ街の看護卒シュヂイゾンの所へ駈出して行つて貰ひ度い。分つてるでせうな？直ぐ此處へ來いと言つて下さい。もう話してあるから、あの男は知つて居ます。さう……」

若い町人は絶望した様な顏付で帽子を取つて、戸口の方へ飛んで行つた。

「あゝ……お待ちなさい！」アルノルヂイは忌々さうに呼留めた。「あの門の傍に私の

馬がゐるから、あれに乗つてお行きなさい……早くしなきやならないのだから……少しも早く！」

轍のがら〳〵と鳴る音が聞えたと思ふと、直ぐ遠くの方に消えて了つた。醫師のアルノルヂイは死に行く幼兒の傍に、只一人居殘つた。

室の中はひつそりとして息苦しかつた。そして窓外の庭で雀共が此佗しく汚い室の中で、何う云ふ事が起つてゐるかと云ふ事も知らぬげに、厚かましく啼き立てるのを聞くと、變な氣がして來るのであつた。幼兒は依然としてしや嗄れた聲で呼吸をし乍ら、縺れた毛の粘り付いた石の樣に重い頭を、枕の上で彼方此方動かして居た。脹れ上つた肺が小さな胸を、ずだ〳〵に引裂くかの樣に思はれ、熱湯のやうに熱い血は腦に充ち溢れて、名狀し難い痛みを以て壓し付けるのであつた。小さな手足は痙攣的に收縮して、まるで何か深い穴から出ようと跪き乍ら、何うしても出る事が出來ないで、一つ所にじたばたしてゐる樣であつた。幼い者は自分が何うしたのか分らないで、丁

度丸太に押へ付けられた仔猫の樣に、一生懸命に體を拔き取らうとして焦慮りながら、目に見えぬ力と闘つてゐるのであつた。

何うかすると彼は誰かを呼ぶ樣に、

「マア……」とやつとの事で聞き取れる位な、壓し付けられた樣な聲を立てた。それは巣から落ちた小雀の聲によく似てゐた。

屹度彼はあの大きな、優しい、暖い母親が急いでやつて來るのを、待兼ねてゐるのだらう。此母は何でも一切の事を知つてゐて人生を支配し、あらゆる不幸を庇つて呉れる樣な氣がするに相違ない。

「さう、さう……」と醫師のアルノルヂイは機械的に呟いて、脈を取つて見たり、窓の傍へ寄つて、外を飛び交ふ雀を無意味にぼんやりと長い間眺めたりした。

何時も瀕死の子供の枕許についてゐる時と同じ樣に、彼の感情は混沌として尨大な形を取るのであつた。

醫師のアルノルヂイは、假令今彼がしようと思つてゐる樣に、自分の生命を犧牲にして幼兒を助ける事が出來たとしても――少くとも苦痛を輕くする事が出來たとしても、それを少しも重大視しないで、何等の感慨をも起さないであらう。併し若し彼がかうした益もない無數の苦痛を作り出し者を發見したなら、年老ひた一醫師ではあるけれど、堂々と恐るゝ所なく其者に面と向いて突つ立つて、呪詛の言葉を吐き掛けたに違ひない。死も、裁判も、永久の苦痛も彼は少しも恐れなかつた。

けれどアルノルヂイは其處に何等救助の方法がない、呪詛も、哀願も、論證も、永久に答を得る時がない、と云ふ事をよく知つてゐたのである。

太陽は矢張依然として東から昇つて、西へ沒するであらうし、花咲き盛る地球は膿汁の中を廻轉するであらう。併し一切は無益なのである。彼醫師のアルノルヂイが泣かうと冷笑しようと、哀願しようと呪詛しようと、乃至は自分の頭を壁へ打つ付けて、粉微塵にしようと一切勝手であるが、併しそれはすべて荒野に於ける啞聾の悲鳴と同

じ樣に、何の意味も無い事なのである。

只苦痛の爲めに生れ出た此の小さな一存在物が、未だ死を恐れる事を習はないで、此の愛すべく同時に咀はしい人生の美しさを、知らない中に死んで行くのだ、とかう考へるだけがせめてもの慰めであつた。

醫師のアルノルヂイは寢床の中で身を跪いてゐる蜘蛛のやうな、此不思議な生きものを見遣つた。虫のやうな恰好をした細い手足や、曲つた背中や、充血した樣な黃色い頭や、重々しげな後頭部や、狹い額などを見詰め乍ら、

「さう！」と彼は物思はしげに繰返した。

彼の腦裡には、遺傳性の缺陷で醜くされた此の憐れな生き物が、將來營むべき筈であつた生活が、極めて細かいデテールまで歷々と浮んだ。それは何と云ふ苦痛に充ちた、無意味な、詰らない生活だらう！さうして又彼の子孫は徐々に衰滅すべき運命を擔つた、恐しいものであつたに相違ない……而もかうした蜘蛛の樣な生物は、何と

云ふ生の執着の強い、繁殖力の盛な事だらう！若し死がかう早く訪れなかつたら、醫師のアルノルヂイすら嫌悪の念に顔を顰める程、恐しい犯罪と、醜悪と、魯鈍と、無限の苦痛とが、此室の中から世界へ膿汁のやうに流れ出したに相違ないのだ。

漠然とした巨大な結論が、醫師の腦中で次第に熟して居たけれど、それを最後まで徹底させる丈の力が足りなかつた。其後明晰で大膽な頭腦と、堅固な情念を有つた今一人の人間が、醫師アルノルヂイの力無く尻込みして發し得なかつた一言を、男々しく言ひ放つたのである。若し此の老醫師に堅固な意志があつたならば、彼はその太い手を差上げてかう言つたに相違ない。

「あゝ自然界のあらゆる現象に歡喜して、何一つ悪い事をしなかつた此の憐れな生物が、到底自分の力に堪え得られなくなる迄、苦痛の爲めに身を腕くと云ふ事がそれ程必要なのか？併し俺は何人にも意志を束縛される事のない、自由な理智を持つた一箇の人間だから、たゞ一擧手一投足の勞で、此の哀れな犠牲を拐取る事が出來るのだ！

或は人間の理智を絶した成算があつて、それが人生を支配してゐるのかも知れぬ……さうかも知れぬ！併し俺はそんなものを知らぬ、從つてそんな物を認めない！」

戸が靜かに軋んで、蒼白い顔の女がそつと室の中へ入つて來た。そして丁度叩かれた犬の様に、閾の所から媚る様な視線を醫師に投げた。

「何うです！看護卒は來ましたかね？」アルノルヂイは我に返つてから訊いた。

「いゝえ、未だ様子がありません……」

醫師はちらと子供を見遣つて、溜息をついた。

「お湯を用意しました、先生」奇妙な目付を醫師から放さないで、其場を動かうともしずに、彼女は小さな聲でかう言つた。

「いや、それなら結構」とアルノルヂイは言つた。

「先生……」一層小さな聲で彼女は言つて、一寸一足彼の方へ進み寄つた。

「先生……」

「え、何ですね？」とアルノルヂイは惱ましげに訊ねた。

「グリーシャは如何でせう……よくなるでせうか？」今度は全然聞き取れぬ程の小さな聲で、彼女の乾いた唇がかう言つた。そしてまるで何か言ひ間違ひでもした樣に、聲がびくりと慄へた。醫師の小さな目は落付きのない樣子でぱち〳〵と瞬いた。

「それを當にしてるんですよ……」不自然な程磊落な調子で彼は答へた。

女は疑はしげに彼を眺めた。と醫師は彼女の目が次第々々に大きくなつて、遂に全世界を充し盡したら、彼の魂を覗き込むやうな心持がした。彼は思はず立上つて又窓の傍へ近寄り、眼前にぽつと斑點の樣に擴る綠の木の葉をじつと眺め始めた。

『何と云ふ大きな木の葉だらう！』何故か彼はこんな事を考へた。

「何うか先生お骨折を願ひます……屹度神樣のお報ひがございます」やつと聞える樣な囁きが彼の耳に入つた。「あのグリーシェンカは私共のたつた一人息子で……」

「グリーシェンカ！」丁度墓の上の枯葉を秋の風が撫でゝ通つた樣な囁きが、室の中で

さら〳〵と響いた。

此の葉摺れの樣な囁きの中に千萬無量の愛と苦しみが籠つてゐたので、醫師は自分がたつた一分間前に此のグリーシャの不幸な運命と醜惡な生活を想像して、今の中に早く死んで却つていゝ事をする、などゝ考へたのが不思議に思はれる程であつた。假令彼が何んな人間であつても——馬鹿でも、不具者でも、惡人でも、彼女に取つてはたつた一人切りのグリーシェンカである。殆ど聞えるか聞えないかの囁きの中から、臆病な耐る樣な言葉の中から何うする事も出來ない程力强い偉大な感情が頭を擡げて來た。この感情に比べると自分などは砂粒ほどに思はれて、醫師は心の中に恐怖を感じた。此の恐るべき係蹄の中に避くべからざる無限の苦痛、永久に亡びる事のない苦艱の種が潜んでゐるのだ。

「これは恐しい！」とアルノルヂイは口走つた。

「何ですか？」

「いや何でもない……あゝ何うやら看護手が來た樣だ！」と醫師は答へながら、まるで問を避ける樣に再び寢臺の傍へ歸つた。

看護手が來ると、彼は素直に背廣を脱いで袖をたくし上げ、たつた今迄考へてゐた事はすつかり忘れて了つて、丁度手車に縛り付けられた懲役人のやうに、再び苦しい無益な仕事に取掛つた。

彼は長い間一心不亂の體で、石鹼の泡を散らしたり、溜息をついたり、鼻を啜つたりしながら、手を洗ひ淨めてゐた。蒼白い顏をして女房は彼に湯を汲んで出したが、その一擧一動に臆病さうな色と、醫師の偉大なる知識に對する深い尊敬の念が現れてゐた。看護手は赤毛の丈夫さうな男であつたが、巧みにてきぱきと器械や、綿や、繃帶などの準備した。その樣子がまるで何か種の組み入つた、手品でもして見せようとする樣な風付であつた。

幼兒は絶えずしゃ嗄れた聲を立て乍ら腕いてゐた。

やつと醫師のアルノルヂイは手を洗ひ終へて、じつと驗す樣にそれを眺めた後、空中で一振して寢臺に近寄つた。

「さあ、あんた方は……」町人と妻の方へ向いて首を振り乍ら、彼は溜息をつく樣にかう云つた。

男は直ぐ吃驚した樣に戸の傍へ飛び退いたが、痛せこけて窶れた女房は、只祈る樣な視線を醫師の方へ注ぐばかりであつた、かうした目付は自分の仔を川へ棄てられようとしてゐる牝猫に、よく見受けられるものである。

「私の言つてるのが聞えないんですか！」一寸一瞬間醫師のアルノルヂイは苛々した氣持で、かう怒鳴り付けたが、直ぐ樣我に返つて、深い憐みを聲に響かせ乍ら付け足した。「いや內儀、あんたはその……出て行つて下さい……でないと私まで氣が亂れます……何分仕事が仕事だから……さあお行きなさい、此處を出て下さい……出來る丈の事はしますから！」

其時彼女は從順しく、とほ〳〵と室を出て行つた。けれど戸口の處でもう一度立止つて、無言の儘醫師の顔を見返つて、その視線を捕へようとした。醫師のアルノルヂイは顔を反けた。

幼兒は急に泣き止んだ。まるで何か恐しい物の接近を感じた樣に、どんよりとして視覺はないけれど、理解力のある樣な目で、じいつと醫師を見詰めるのであつた。彼はいきなり傍の方へ身を退かうとさへしたが、丁度牛殺しの樣な赤毛の一杯生えた頑固な手が、それを押し止めた。醫師は靜かに注意深く、惱しげにぴく〳〵動く充血した、鳥の樣に細い喉首に手を觸れた。と、ぎら〳〵光るメスの鋭い刄先が、一寸突いて押へたかと云ふと、もう皮膚を切り破つた。一瞬間、生きた細胞組織の軋む樣な忌はしい感觸を覺えたが、突然眞赤な南京玉の樣な滴が滲み出た。メスは巧みに軟骨を避け乍ら、猶一層深く斬り込んだ。そして血はアルノルヂイの太い指の陰からだくだくと流れ出て、幼兒の細い頸を頸飾の樣に取卷くのであつた。病兒はじつと靜まり

返つてゐたが、急にぴくりと身慄したかと思ふと、丁度腦を錐で揉まれる兎の樣に、全身小刻みにぴく〳〵と引つ吊り始めた、小さな管は血にまみれ乍ら、どく〳〵と血を吹く暗い穴の中へ譯もなく入つて行つた。とひう〳〵笛の樣に鳴るしや嗄れた息が留つて、さながら全世界に一瞬間の沈默が襲つて、周圍の物がすべて偉大なる祕密を瞑想し乍ら、ひつそりと靜まり返つた樣に思はれた。

醫師のアルノルヂイは汗にまみれて顔を眞赤にし乍ら、盥にぺつと唾を吐いた。すると血に染つた唾はぺつたりと重々しく水の中へ落ちた。

やがて空氣の樣に清らかな、新しい、穩かな落付いた呼吸が室の中に聞えた。それは人間の耳の聞き得る最も優れた音樂の樣に、美しく輕やかであつた。

併し醫師のアルノルヂイは沈み込んで居た。彼の目は試驗する樣に嚴つく光つてゐた。彼は長い間無言の儘寢臺の傍に立つてゐたが、やがて輕く太つた手を振つた。その手は明らかに慄へて居た。

赤毛の看護手は手早く器械を集め始めた。

幼兒は穏かに兩手を置いた儘、ぐたりと長くなつて音無しく臥てゐた。けれども其顔は蒼褪めて、紫がゝつた陰が現れ始めた。そして自由になつた呼吸も次第に低くなつて行つた。

六

醫師のアルノルヂイが無益な努力に疲れ果てゝ、汗みどろになつて庭を出たのは、もう暗くなり初める頃であつた。

太陽は既に沈んで、清らかな柔い色調が空に漲り、家々の庭は暗くなつて、もう埃つぽく乾いてゐないで、薄暗と新鮮な氣に充された綠色を呈して居た。微風が柔く醫師の熱い顔に吹付けて、氣持よい涼氣が彼の濡れた額を撫でた。ほつとした樣な悅ばしげな新しい物音が、四方から聞えて來た。それは丁度地球の上の重みが取去られて、息が輕くなつた樣な工合であつた。何處かで人の笑ふ聲がして、誰やら響のいゝ聲で呼

び交ふのが聞えた。敎會では晩禱を知らせる鐘が鳴つて居た。すべての物は堪え難く暑い長い一日の後に訪れた、晴やかな晩にのみ見られる樣な、美しい悅ばしげな姿を呈してゐた。

只醫師の背後には息苦しい、暗い室が殘つてゐて、その中には小さな引伸した樣な死骸が薄暗の中で見る〳〵冷くなつて行き乍ら、横はつてゐるのであつた。其處には丁度斃れた獸の上に群る黑い蠅の樣に、薄黑い姿をした何處かの老婆達が、こそ〳〵歩き廻つて、突き通す樣な、興奮した、粗野な叫び聲が開け放した窓から聞えた。

「あゝグリーシャ、うちの可愛いグリーシェンカ！あゝ皆さん何うしませう！……」

醫師のアルノルヂイは何處も彼處もしんと靜まり返つて、遠い空さへも此の淋しい悲鳴に、注意深く耳を傾けて居る樣に感じられた。

耳門の所で若い町人が彼に追付いた。赤い頰髯のくしや〳〵した蒼白い彼の顔は涙に濡れて、目は依然として慴えた樣な、絶望した樣な表情を浮べてゐた。彼は屹度

醫師を見もしないらしく、慄へる唇で何やらくど〳〵呟き乍ら、握りしめた拳を突き出すのであつた。

「こ……これ……これを……」と彼は他愛のない調子で呟いた。

醫師のアルノルヂイがその拳を見ると、じつと握りしめた紙幣の隅が目に映つた。

「え、……何だつてそんな物を！」肥つた慄へる手を振り乍ら、彼は忌々しげにかう言つた。

「お取り下さい、お取り下さい……それは不可ません、骨を折つて下さつたんですもの……私達だつて分つてゐます……神様のお心ですから……」まるで炭を塗つたやうに黑い拳を依然として突き出し乍ら、町人は全然無意味にかう繰返した。

アルノルヂイは不意に顔を顰めて、引つたくる樣に金を取ると、その儘くるりと踵を轉じて、まるで後から撲られはしないかと恐れる樣に、背中を屈め乍ら耳門を出て行つた。

白つぱい毛をしたニキータは、待兼ねた樣に愚かしい微笑を以つて彼を迎へた。

「死にましたかね？」醫師が體の重みで馬車をぎし〳〵軋ませ乍ら、腰掛に尻を下した時、彼はかう訊いた。

「お前もその中何時か死ぬのだ、馬鹿……」醫師のアルノルヂイは機械的にかう答へ乍ら、杖の握りで彼の背中を一つ突つついた。

ニキータは此の氣の利いた洒落にさも愉快らしく笑ひ乍ら、立ち草臥れた赤毛の牝馬に鞭を呉れた。埃は車輪の後に重々しく舞上つた。そして醫師が早くも初めての角を曲らうとした時、錐で空を穿つ樣に鋭い叫び聲が、澄んだ夕方の空氣を慄はせ乍ら、未だ彼の耳に入るのであつた。

「あゝ皆さん何うしませう！あゝ聖母マリヤ樣！」

馬車は角を曲つて了つた。そしてすべてはまるで存在しなかつた物の樣に、靜まり返つて了つた。

七

もうすつかり日が暮れて了つた。疲れた氣難しけな顏をした醫師のアルノルヂイが、最後の往診を濟さうとしてゐた時には、冷い綠色がゝつた夕燒が、遙かな曠原に消えなんとしてゐた。

彼はもう久しい以前から自分の患者を區別する事なく、子供の所でも、女の所でも、年寄の所でも、若い者の所でも、同じ樣に惜げな樣子で出掛けてゐた。併し一ケ月ばかり前鄕里へ歸つて死に掛つてゐる、元女優をしてゐた病人の所へ呼ばれてから以來、醫師のアルノルヂイは何時ともなしに、毎晩すつかり往診が濟んでから、彼女の所へ立寄る習はしとなつて了つた。始めの中彼も治療をしてゐたが、何分不治の病なので斷念して了つた。何時も入つて來ると、一寸一分間ばかりと云つた樣に、帽子や杖を手から放さないで座る辯に、病人の絕間ない靜かな饒舌に耳を弄らせ乍ら、黃昏の靜寂の中に二時間も三時間もじつとしてゐた。病人は段々彼に馴れて來て自分の一生涯

を――波瀾重疊極りない馬鹿げた女優生活を、すつかり彼に話して聞かせたのである。

若し何か大切なものが彼を引留めたのである、それは病人の靜かな聲や、愁ひを含んだ目付や、靜かな夏の黃昏病人の室で彼の疲れた心に忍び入る、物思はしげなつゝましい憂愁――かう云ふ物が、醫師のアルノルヂイに取つて妙になくてならぬ物となつたのである。

何時もの樣に太い杖の上に兩手を組合せて、づつしりと身を凭せ掛け、その手の上に肥えて脂ぎつた腮を載せ乍ら、醫師は庭へ向けて廣々と開け放した窓を、一方に控へ乍ら座つてゐた。今一方の側には病人が白い枕で體を包みながら、安樂椅子の上に身を休ませて、何か非常に大切な事を少しも早く言つて了ひ度いと焦慮る樣に、低い聲で忙しさうに話し續けるのであつた。

「何と云ふ晩でせうねえ先生……何ていゝ氣持でせう！私は丁度かう云ふ晩に死に

度うございますわ……私は何よりも一番夜中に死ぬのが恐しいんですの……全く可怕いでせうね先生！だつてあの墓の中は暗いんでせう……暗いんでせう……私の様になつて了つてから、何にもせよ望みを抱くなんて滑稽ですけど――ねさうでせう。ですけど矢張り私が最後に見る物は、あゝして靜かに消えて行く空であつて欲しいと思ひますわ……何だか樂なやうな氣持がしますの……一日の日が靜かに死んで行つて、空も段々暗くなる、ね、そして私も死んで行く……私はもうちやんと諦めて了ひましたの先生……何うか心配しないで下さい。私はもう何時かの様に泣いたりなんかしやしません……泣いて何うしませう。泣いたつて何うせ役に立ちやしないんですもの！只私自分が墓場へ運んで行かれて、土を被せられる事を考へて見ると恐しくなりますわ……みんなは各々家へ歸つて了つて、私一人が殘るんでせう、丸つ切り一人法師で……その中に夜が來る、邊りには十字架が立つてゐて、事に依つたら風が起るかも知れません。そして周りは眞暗なんでせう……あゝ恐しい先生！そりやあ私も、さうなればも

う何にも感じないつて事は知つてますけど、でも私今恐しいんですの先生、あなたは本當に優しい親切な人だから……約束して下さいな。皆が歸つて了つた時、あなたは墓場に殘つてゐて、暫く私の傍に付いてゝ下さいな……約束して下すつて？あなたがさうして下さるつて事を知つてゐたら、私そんなに恐しかありませんわ」

「殘りませう」と醫師はがらんとした樣な聲でかう言つた。

「まあ何うも有難う！先生、あなたは外の人の樣に、そんなに早く私をお忘れになりやしないでせうね。そりや私分つてますわ……ねえ私の好きな先生、あなたは何うしていつもそんなに難かしい顏をしてらつしやるんですの！尤も私は馬鹿な事を訊いてますわねえ。大方毎日の樣に誰か一人宛墓場へ送つてゐる人が、喋つたり笑つたり出來るものですか？ねえ先生、あなたは私が死んだ後で想ひ出して下さるでせうか？だけどこれも矢張り可笑しな話ですわ。あなたはこれ迄長い間數の知れない程の人を、墓場へお送りなすつたのですもの、みんな一々憶えて居られるものですか！」

「私はみんな憶えてゐます！」依然として小さな聲で醫師は答へた。彼の顏――大きな肥つた顏は暗に隱れて見えなかつた。

「さうですか？だからあなたはそんなに優しくつて、沈み勝ちなんですわね！先生、あなたは優しい方ね、恐しく優しい物柔らかな方ね……だけど不幸な方ですわ。大抵の者はあなたを重苦しい不愉快な人の樣に思つてゐます。私だつて初めの中はあなたが可怕ござんしたの。けれど今では私どんな人でも、すつかり腹の底まで分る樣な氣がします……何だか以前とは見方が違つて來ました。よく死に掛つた人間は、健康な人の思ひも寄らない樣な事を、見たり感じたりするつて話ですが、現に私もあなたの大きな優しい心が見透せます。そしてあなたが此世の生活を大變々々苦しく感じてゐらつしやるのが、よく分りますの。ねえ先生、何故此世にはこんなに苦しみが多いのでせう？」

「知りませんなあ」と醫師のアルノルディは答へた。

「知りません……知りません……誰も知らないんですわねえ！」まるで獨言の樣に小さな聲で、病人はかう繰返して、一寸口を噤んだ。

黃昏の光の中に彼女の顏は直白に見え、暗い二つの目は濃過ぎる位黑く、かつきりと其上に浮出して居た。其大きな悲しげな目は一種不可解な表情を以て、庭の上に擴つた淸らかな廣々とした、次第に暗くなつて行く空を見上げて居た。夕燒の反映は彼女の落込んだ頰や、足を卷いた毛布の上に力無く載つてゐる兩の手に、薄く光るのであつた。

「先生」彼女は依然として低いせか〳〵した聲で囁き始めた。「今私はね、達者で若かつた時にまるで考へなかつた樣な、或一つの事を考へて居ますの……一體何だつて私はあんなに意地惡で、喧嘩買で、そして殘酷だつたのでせう？私には人を苛めると云ふ惡い、病氣があつて、私が自分で愛して居る人を、何れ丈無駄に苦しめたか分りませんわ。私は何だか皆の仕方が間違つてゐて、みんな私を侮辱する樣な氣がしました。

つまり自分の利益の爲めに私を利用する許で、其實少しも私を愛して居ない樣な氣がしたんですの……私は少しも人を信じないで、一語々々に何かしら隱れた意味――それも決つて汚らはしい意味を探したものです……あゝ何の位言ひ爭つたり、不快な思ひをしたり、辱しめたりした事でせう……本當に何れ位不快な感情で血を濁したか、考へても恐しい樣ですわ。而もその起りは何でせう！今になつて私は始めて、それがみんな詰らない事だつたと云ふことが、はつきりと分りました。假令人が嘘を言つたとしても、それが一體何うしたのでせう……それに皆が嘘を吐いたのも大抵の場合、私が不快な眞實を忍ぶ事が出來なかつたからですの……それに又大抵の人が私を恐れて嘘をついたんですよ。何故つて私は恐しく悋性が無くつて、一旦癇癪を起したら最後、何んな恐しい事でも言兼ねなかつたんですからね……つまり皆を苦めたんです。人一倍餘計に私を愛して呉れる人を、私は却つて餘計に苦しめたんですの！それに全體として私は他人から何んな事を望んだのでせう？私はまるで自分が何か特別な女で

でもある樣に思つて、みんなが私の爲めに、生れ變つた樣な人間になつて呉れなければ厭だつたのです。全く誰にもせよ人が自分を愛して呉れたら、それに對して感謝しなければならないのに、私はそれを自分の權利か何ぞの樣に考へて居たんですの！……あゝ本當にこの爲めに何れ丈の悦びが無駄に失はれたでせう。又私自身も何れ丈の苦しみを味はつたでせう！……お互に心持よく、優しく愛情を以て暮すことが出來るのに、何だつてこんな思ひをするのでせう！ねえ先生、今壽命が殘り幾らも無くなつてから、私はあんなに馬鹿々々しく失つて了つた生涯が、一分々々悼ましくつて堪らないんですの！今かうして死ぬ前に、自分のした一切の馬鹿々々しい事、良くない事の爲めに、何れ丈悼ましい、恥しい、口惜しい思をしてゐるか、それを充分に言現す事が出來たら、世の中の惡も隨分少くなつたでせうにねえ！……けれど私もそれを言現す事が出來ませんの。只何うかすると辛くつて堪らなくなつて、自分で自分の頭を壁へ打つ突けてやり度い樣な氣がします……がもう取返しは付きません！何よりも一

番恐しいのは、此取返しが付かないと云ふ事ですの」

醫師のアルノルヂイは大きな重々しい頭を窓の方へ向けて、じつと庭の方を見詰めてゐた。誰やら靜かな木立の下を音もなく歩いてゐるのであつた。

「先生何をそんなに見ていらつしやいますの？あれはネルリです……御存知でせう？」

醫師は無言の儘窓外を眺め乍ら、何やら考へてゐた。患者は庭の靜かな足音に耳を傾けてゐたが、丁度病兒の目を醒すのを恐れる樣に、小さな聲でかう言つた。

「あの子は不仕合せな女です？あの子の境遇は本當に恐しうございますわ。此町の人があゝした出來事を、何んな目で見るかと云ふ事は、あなたもよく御承知でございませう。尤も私だつて元は同じ目で見てゐたのですが、今醫師が殘り幾らも無くなつて、散々考へて考へ抜いた擧句、人間と云ふものは詢に悅びの少い不幸な者だから、假令何んな事であらうとも、その爲めに人間を責めるのは慘酷だ、と云ふ事が分りま

したの！」

彼女は再び物思ひに沈みながら、細い透通つた手で靜かに毛布の端を弄つた。その指は生命力が盡き掛つて、まるで蠟で作つたものの樣に見えた。醫師のアルノルヂイは依然として沈默してゐた。彼の重々しい姿は黃昏の薄暗の中に、薄黑い汚點の樣にぼうと滲んでゐた。

「可哀さうなネルリ！」と患者は又話し出した。「そりやあ一時夢中になつた事は事實です……だけどその爲めに誰か迷惑を受けたとでも云ふのでせうか？……何うも世間の人は他人の幸福が不愉快な爲めに、何も彼も打ち壞して了つて、幸福な人が居ない樣にしようと、一生懸命に骨折つてゐるとしか思へないぢやありませんか！……で一緒になつて子供が出來た、それで結構な筈なんですが、本當はさうでなくつて、あの子は何處へ行つても追ひ出されて、教師の職も奪はれて了ひました……一體あの子は何うしたらいゝのでせう、何で暮して行くのでせう？……夜の巷へでも墮ちて行け

と云ふのですか？大方さうして欲しいのでせうよ。まあ私が引取つたからいゝ樣なものの、若し居なかつたら何うでせう！……全く不仕合な娘ですわ。終日何やら忙しさうに働いたり、私の看病をしたりして、晩になると庭を散歩するんです……默つて散歩するんですの。あの子は何時も默つてゐますわ。時々口の中でそつと唱ふ位なものですが、それを聞いてると堪らなく淋しくなりますの！何うかすると私は泣き乍らこんな事を考へますの——あゝ今に私も死んで了へば、ネルリも死ぬ、又あの子を蔑んで迫害した者もみんな死んで了つて、私達の事などまるで知らない人達が生活を始めるのだ……こんなに短い果敢ない人生を、何だつてわざ〳〵汚れや憎しみを以つて傷つけるのだらう、と云つたやうな事を考へると、私はあの子を慰めたり劬つたりして遣り度くて、堪らなくなつて來ますの……けれどあの子は恐しい誇りの強い女で、死にかゝつた病人の私さへ避ける樣にして居ます。あの子は辛いんですよ、先生？」

醫師のアルノルヂイは、まるで喉の中に何か小さな虫でも居る樣に、奇妙な短い音

を發し乍ら、一層重々しげに腮を兩手の上へ載せた。患者は暗の中でさへきら〳〵と輝く、悲しげな目で彼を見遣つた。けれど何一つ目に入らなかつたので、又話し續けた。

「先生、私は淋しくつてそして可哀さうなんですの……自分の身も可哀さうなら、ネルリも可哀さうだし、あの空も可哀さうです。そしてね先生、死んで行くのが殘念ですの！而も一人で死んで行くと云ふ事が猶辛うございますわ。私が舞臺に立つてゐた時には周りにうよ〳〵する程の人が居ましたが、今ではみんな私を忘れて了ひました。だけど私は泣言を言ひません。そんな事をしたつて何になりませう？……それに矢張り私が自分で惡いのですわ。私は何時もかう云ふ風な女として、此儘人から愛して貰ひ度かつたんですの……意地惡だらうと、卑屈な女だらうと、そんな事には一切頓着なしにね！所で皆が私を愛して呉れたのは、私の持つてゐたたつた一つの善い物の爲めでした——つまり美しい肉體の爲めでした。所が肉體は今かうして亡びて行つ

て、以前私の傍へ人を牽付けた物は何一つ殘らなくなるのです……あなたには到底もお分りにならないでせうけれど、人が私の性質を變へようと思つて、何うかそんなに癇癪持の、我儘な、意地惡でなくなつて呉れと賴んだりなどする時に、私は何の位腹を立てたか分らない位ですの……所がかうしてその報ひが來ました！私はあのアルベーニンが病氣すると直ぐ私を棄てゝ了つたからと言つて、あの人を非難しようとは思ひません。あの人は生活と女を愛する、健康で快活な人ですもの。あの人に必要なのは戀人で、死に掛つた人の哀れつぽい目付ぢやないのです……仕方がありません、私はあの人が私の魂を愛する樣に、又此の魂が愛を受ける價値のある樣にしようと、努力しなかつたんですものね。まあ犬の樣に死んで行きませうよ……構ひませんわ……その中にあの人も矢張皆に忘れられて、同じ樣に死んで行くでせう……その時はあの人も私の事を想出して、可哀さうに思ふでせうよ……その時は屹度あの人も矢張り苦しい思ひをして、自分の一生は誤りであつたと悟るでせうよ？でもまあ仕方がありま

せんわ、今となつては何一つ取返しは付かないんですもの……一人で死ぬものは一人で死ぬのです！……まあかうして生れ故郷へ死にゝ歸りましたが、此處にだつて誰一人緣者は無いのです。只何となしに昔馴染の土地で死に度くなつたんですの。此處では何も彼も見覺えがあるもんですから、何だかもう一人ぼつちぢやない樣な氣持がしますわ。何處かの療養所や病院などだつたら、隨分辛かつたでせうけれどね……私はね先生、此處の女學校で勉强したものなんですよ！」

患者は靜かな聲で笑つた。

「本當に人間てものは、不思議な程自分の生涯の察しが付かないんですねえ。私が小さな女學生で、本を持つて黑いエプロンを掛けて、此處の學校へ通つてゐる時、こんな病みほゝけた、ひよろ長い、肺病持ちの女優上りとなつて、元宿題を勉强した同じ此窓の傍に臥ようなどと、何うして考へられませうか！……それとも……だけど私には巧く言へませんわ。もう澤山！私はのべつ喋り通しに喋つて、先生屹度お疲れにな

つたでせう。それに私のお喋りなど聞いてるのは、お辛いに決つてますわ。何うかお歸り下さい。私も直ぐ寢付くかも知れません。さあお歸り下さい」

醫師のアルノルヂイは重々しく立上つた。

「何うか又寄つて下さいな。もう私の療治をしていらつしやらないのは、自分でもちやんと承知して居ますわ……もうかうなつてから何うなるものですか。只何がなしに寄つて下さいな、私の好きな先生……」

醫師は太いむく〳〵した指で自分の方へ差し延べられた輕い弱々しい手を取つた。と不意にのつそりした重々しい體を屈めて、死に掛つてゐる蒼白い指を接吻した。病人は驚きもしないで、只優しく淋しげに笑つたばかりであつた。

「何の爲めですの？……さあ先生お歸りなさい……御機嫌よう」

醫師のアルノルヂイは室を出て行つて、彼女は只一人窓の傍に取殘された。そして次第に薄れて行く夕燒の弱々しい反射を受け乍ら、白い枕の中に埋つた彼女の顏は、

段々と蒼白く溶けて行く樣に見えた。それは丁度貴重な纖細な畫が次第に耗れて、色が褪めて行くやうな工合であつた。

戸外は未だずつと明かつた。何時も暗い室から戸外へ出た時に誰でも感じる樣に、アルノルヂイは未だ恐しく明るいのに吃驚した。頭の上に空はたゝ深みを增して來た許りで、幾つかの早い星は丁度黃金の氷の碎片の樣に朧病な、透通つた光を放ち始めた。庭の中からは何かしら物悲しけな、まるで病氣でもして居る樣な花の薰りが、快い濕りけを帶びて漂うて來た。そして木立の下には息の室る樣な、沈默勝ちな最初の陰が群り始めた。

耳門の直ぐ傍で醫師のアルノルヂイは、一人の若い女に行會つた。彼女は朧病さうに身を避けたので、醫師は摺れ違ひさま黑い目と、嶮しく引寄せた眉と、半ば慴えた樣な半ば物凄い目付を、見分ける事が出來たばかりである。彼女は醫師が通り過ぎて了ふ迄、じつと木立の下の小暗い陰に立つて居た。そして黑い着物を纏つた胸の邊に、

蒼白い細い兩手を押し當てながら、奇妙な目付で彼を見送つてゐた。

『これが屹度ネルリなんだらう……』と醫師は考へた。

耳門の所で彼は思はず後を振返つた。

今度は仕事が濟んで自由の體となつたので、もう家へ歸ることが出來た。夜は此の小さな町を華やかな生々した灯火で飾つた。遙かに町の公園では、毎晩決りの樂隊の演奏が聞えて、始終絶間なくその方角を指して、若い令嬢達は薄色の着物を暗の中に白く浮出させ乍ら、若い男達は卷煙草の火を赤く光らせ、無遠慮な高聲で話し合ひ乍ら、ぞろ〳〵と歩いて行つた。通りの端には内部から灯に照らされた巡廻曲馬團の天幕と、その入口に飾られた色樣々な花環のやうな電氣が見えてゐた。何處も彼處も愉快で暢氣さうに思はれた。

八

家へ歸ると醫師のアルノルディは蠟燭をつけ、背廣を脱いで、がつかりした樣に卓

に向つて腰を下した。その上では小さな湯沸がもうしう〳〵と煮立つて、たつた一つ切りのコップが淋しさうに、自分の老主人を待つて居た。

室の中はまるで安宿の樣にがらんとして居心地が惡かつた、露な壁の中には微くさい、年取つた獨身者の匂が滲み込んでゐた。寢臺はこんな大きな肥つた男の物として居るし、埃は薄い層をなして、厚い綠色の本の立つてゐる棚を蔽うて居た。開け放した窓からは蛾が出たり入つたりして、恐しい勢で蠟燭の火の周りを飛び廻つたり、力無げに薄い翼を慄はせ乍ら、卓布の上を這ひ廻つたりして居た。釣り合の取れない程大きな彼等の影は、蝙蝠の樣に音もなく壁の上にさら〳〵と動いた。そして醫師の背後には彼自身の大きな影が、天井の方まで折れ曲り乍ら伸びて居た。それは誰かしら顏の無い黑い物が、無言の期待を抱き乍ら、彼の上へのし掛つてゐる樣であつた。

窓の外から夜の冷氣が有るか無しに流れて來て、引伸された樣な蠟燭の焰がわな

〳〵と慄へた。そして其黄色い蠟がかつた光を受けて、疲れてたるんだ醫師の顔が奇妙な顰めつ面をして居る樣に見えた。

遙かに樂隊の音が響いて來た。屹度其處では色電氣の輝きや、女仕立屋と散歩する聯隊付の書記のカイゼル髯と同じ樣に、何か陽氣で俗な物を演奏してゐるに相違なかつたけれど、此の老醫師の室で聞くと、何か高調な、悲しい、美しい音樂の樣に感じられた。時々孤獨な眞鍮喇叭の聲が段々と調子を高くして、何處か星空の下の邊りで惱ましげな、助けを呼ぶ樣な節を引き乍ら、次第に消えて行くのであつた。

醫師は無言に是等の響を聞き乍ら、甘い櫻ン坊のジャムを添へて、濃い茶を一杯々々と際限なしに飲んだ。そして蠟燭の灯と、自分の太いふつくりした手と、物狂ほしい舞踏でもする樣に旋轉してゐる蛾の群とを、交る〴〵眺めてゐた。

蛾の數は數へ切れぬ程多く、而も後から〳〵と新しく暗の中から飛んで來て、慘忍な目眩しい光を目蒐けて突進するのであつた。或者は綠色、或者は白、或者は黄、或

者は染分け、或は花瓣の樣に小さく、或者は毛むく立つて大きな是等の虫の群は、緊張した瞑想にでも耽つてゐる樣に、卓布の上にじつと止つたり、急に引千切る樣に飛び上つて、恐しい灯火の堪え難い光の中を、情熱に驅られた樣に旋回したり、もう飛ぶ力の無くなつた翼を、物狂ほしい程の速度ではた〳〵と搏ちながら、卓の上に根氣よく奇怪な、痙攣的な圓を描いたりするのであつた。此の絶間ない緊張した運動は、聲の無い苦悶と衝動に充ちた、不思議な神秘めかしい混亂を創り出した。開け放した窓の風の爲めに、少し流れ氣味になつた蠟燭には、溶けた蠟にまみれて見る姿も無くなつた、小さな死骸が一面に粘りついて居た。此の不可解な力を以て牽き寄せては、燒き盡して了ふ灯を向うへ廻して、死物狂になつて戰ふ生の爲めの爭鬪に、こそとの音も聞えないのであつた。併し事に依つたら蠟燭を點じた醫師のアルノルヂイに、虫の聲が聞えなかつた丈かも知れない。彼の石の樣な顔は無言の儘、彼等を上から見下して居た。

誰やら急ぎ足に入口の階段を駈昇つて、騒々しく戸をさつと開け放した。蠟燭がぱとつ明るく燃え上つてゆら〳〵と動き、壁の上の巨人の様な影が不安げに搖れた。

醫師のアルノルヂイは誰が來たのかよく心得てゐるらしく、席を立たうともしないで、只ジャムを取らうとして差延した手の透間から、悠然と戸口を振向いた許であつた。

「今晩は醫師(ドクトル)！」と客は聲高に愉快さうにかう言つた。その聲はまるで青春と力の響を悉く集めた物の様に、佗しい室の靜寂の中に響き渡つた。

「お茶を飲みますか？」挨拶の代りにアルノルヂイはかう訊いた。

「無論ですよ！」矢張依然として大きな快活な聲でかう答へると、客は寢臺の上へ白い帽子を抛り出して、醫師の前の椅子に腰を下した。そして座るといきなり椅子の背に反り返つて、から〳〵と笑ひながら、恐しくぎら〳〵光る興奮した目付で、無言の儘じつと醫師を見据ゑた。それはまるで生れて始めて此人を見て、その奇怪な樣子に

驚き呆れたと云ふ樣な風であつた。彼の大きな黑い目の中では、何物かが抑へ付ける事の出來ない樣な勢で、躍つたり光つたりして居た。

アルノルヂイは年取つた餓夫(やもの)らしい馴れた手付で新しいコップを取出し、丹念にゆつくり〳〵それを洗ひ上げ、まるで麥酒の樣に濃い茶を注いで、客の前へ押しやつた。

「ジャムをお取りなさい……櫻ン坊です」と彼は吐息をつく樣な聲でかう言つた。

「櫻ン坊ですつて？……そりや是非頂きませう！」客は滑稽な程感動(ペーソス)の籠つた調子で答へた。

醫師のアルノルヂイは對手の黑く輝く目や、白い額や、柔く渦卷いてゐる髪や、男らしく可愛い顏を、氣難かしさうに横目に掛けてゐたが、突然恥しさうな優しい微笑を浮べた。

「醫師(ドクトル)、あなたは何が嬉しいのですか？」直ぐに若々しい、事を好む樣な聲がかう抑へた。

醫師はもう一度對手を見遣つて、ゆつくりした調子でかう言つた。

「まあ茶でもお飲みなさい、ミハイロフ君」

併し彼はまるで別な事が言ひ度かつたのである。『君の様に若い美しい暢氣な人間になれたら、まあ何んなにいゝだらう。私の様な年取つた陰氣臭い人間は君を見て居ると羨しくもあり、いゝ氣持でもある』――けれど彼はこれを口に出して言はなかつた。

惰いだらけた舌が動かなかつたのである。ミハイロフは笑ひ出した。

「ねえドクトル、ドクトル！あなたはそんなに梟か何ぞの様にぽつんとして居て、よく恥しくない事ですねえ？……外は夜で、星が光つて女が笑つてゐるのに、此人は一人じつと座り込んで、ジャムを添へてお茶を飲んでるんですものね……」

「まあ私位此世の中に生きて見て」アルノルヂイは氣難かしげにかう言ひ返した。「それから又此處へやつていらつしやい。その時改めて話しをして見ませうよ」

ミハイロフは試驗する様な、物思はしげな目付で醫師を見遣つた。と其美しい顔が

突然暗くなつた。漠とした不安が影の様に輝かしい目を掠めて、美しい唇は暗い豫感に襲はれたかの様に心持びくりと慄へた。けれど彼は直ぐに頭を振つて、から〳〵と笑ひ出した。そして丁度春風がふと流れ來た薄雲を吹き拂つた様に、彼の顔は再び青春と生命に輝き始めた。

醫師のアルノルヂイは束の間に起つた、此の急激な表情の變化を無言に觀察してゐた。その變化の早くて明瞭な所に、一種不可解な人を牽寄せる様な美が籠つてゐた。で、極めて纖細な深い心の動きを瞬間的に、明瞭に反射すると云ふ能力の中に、此青年が婦人に對して有つてゐる恐しい魅力の祕訣が潜んでゐるのではないか、とかう醫師は考へた。此時彼はふと悲しげなネルリの姿を想ひ出した。まるで何か貴重な物を落すまいと骨折つて居る様に、蒼白い細い手を胸に押當てながら、木陰に立つてゐる彼女の姿と、半ば慴えた様な半ば物凄い目付とを想ひ出した。

「何をあなたは考へ込んでるんです？ドクトル、今日あなたは何をしたのですか？」

とミハイロフは訊ねたが、出抜けに大きな聲で唱ひ出した。

『……日毎に死人を墓場へ運ぶ！……』

そして醫師が答へる暇の無い中に、彼は早口に、充分自信の無さうな調子で言出した。

「あなたは何時も僕を攻擊しますね……併しあなたもい、加減分つてよさうなもんぢやありませんか……何んな生活をして見た所で最後は同じ事です！後へ歸る事は出來ないのですからね。して見ると、つまり全身の血が湧立つ樣な生活、一分間と雖も無駄のない樣な生活、後になつて後悔する事の無い樣な生活をしなきやならない譯です。人生から享ける事の出來るものを掴まなかつた、と後悔する樣ぢや詰りませんからね。え醫師！」

「一體人生はそれのみでせうか？」

「それのみとは何です？」

「まあつまり女の事です……」とアルノルヂイは目を伏せ乍ら說明した。

「一體それが人生に何の關係があります？」とミハイロフは笑ひ出した。「人生は一つの事實です、而も可成り厭な事實です！……私は只人生の悅びを語つてるのです。若しそれが無かつたら、殆ど誰一人として此人生に堪え得ないだらう、と思はれる樣な悅びを語つてゐるのです。醫師、あなたは女が何れ位の悅びを與へ得るか、と云ふ事を御承知でせうね？」

「さあ！」肥つた醫師は曖昧な唸る樣な聲を發した。

「さあでなくつてさうですよ！あなたにはつまりそれが分らないのです、御存知ないんですよ。でなかつたらそんな引籠り屋の、氣難かしい人間になる筈がありませんもの……一體あなたは何う云ふ風に考へておいでなんです？……僕の云ふ快樂は性的行爲其物の中に存するのぢやありません。それは只自然的結末に過ぎないので、これを外にしては未完成不滿足な感じが殘ると云ふ丈の事です。これはつまり接近の最後の

一階段です、それつ切りです……本當の美はそんな所にあるのぢやありません！」

「ぢや何處にあるんです？」醫師のアルノルヂイは憎げに訊いた。

「さあ、あなたの樣な死んだ人間に何う云つて說明したものでせう……さう、假りにあなたが若い美しい女に出會つたとする……最初の中此女はあなたに取つて全然冷やかな、緣のない人間で……あなたは傍から眺める事は出來るけれど、手を觸れる譯に行きません。彼女の有する一切はあなたに取つて未だ謎です——手袋も、聲も、帽子につけた花も、衣摺れの聲も……目も……其目には暖い深みが潛んでゐるのだけれど、併し氷の壁を避して眺めてゐる樣な工合です。彼女の美はあなたの爲めに存在してゐるのでなく、あなたは彼女に取つて無です。所が他の或男に對すると、暖い、愛に充ちた、情熱的な女なのです……それがふとあなたの慾望の一種不思議な力に依つて、此の神祕な、誇に充ちた、冷やかな存在物が段々と暖くなつて來ます……一瞬間毎に段々近く、理解し易く愛しくなつて來るのです。あなたが攻擊すると彼女は防禦する

さうした捕捉し難い微妙な遊戲の中に、時に近づき時に遠ざかり乍ら、彼女は次第にあなたを深みへ誘つて行つて、あなたの全生涯を一つの意義、一つの目的を以て充して了ひます。日毎に彼女は、丁度花が太陽の光を受けて、一片々々づゝ花瓣を開く樣に、恥を顧みぬ美しさを擴げて見せるのです。其中突然あなたが理解する事も記憶する事も出來ない微妙な一瞬間に、彼女の全身がぱつと燃え上る。そして羞恥の念が全然消え失せて、誇に充ちた物々しい着物が落ちて了つて、幸福と苦惱に燃える露はな體のみが、あり丈の美しさを見せ乍ら、あなたの目の前に殘る許です……醫師、あなたは女の肉體の美しさ見事さが分りますか？……かうして此の○○は恐しい物狂ほしい歡樂の中に、あなたの體と融合して了つて、全世界が何處かへ飛び去つて了ふ樣な氣持がするのです……宇宙間に存在するのはあなた方二人切り、彼女に取つてはあなた、あなたに取つては彼女あるのみです！……ねえ、美しい永遠なガラテヤの物語りも、つまりこれに基づいて居るのぢやありませんか！……而も感情と經驗の深みは計り知

れない位です……時には嫉妬の爲めに泣き、時には歡喜の爲めに唱ひ、時には女をと、ろ火に懸けて責め苛(さいな)みもし兼ねない樣な氣持になり、時には又女の足に接吻するのも厭はないと思ふ！……狂氣の沙汰と言はゞ言へ、これは實際歡喜の極まつた狂氣です！すべて若い美しい女の美しさは何うでせう！彼女があなたを愛する時は、すべての物が其女の調子に彩られて、全世界があなたの目に別物の樣に映ります。たゞ〳〵其時始めてあなたは眞に生活してゐるのです。其時始めて太陽の輝き、月の美しさ神祕めかしさ、暖い夏の夜の心地よさが本當に分るのです！……ねえドクトル、僕が始めて戀をした時は春でした……雪が溶け始めたばかりでね……今あの娘は何うしてゐるか、神樣より外知る者はないですが、一つの印象だけは一生涯忘れる事の出來ない程はつきりと殘つてゐます——よく僕が其娘を夜家へ送つて行つてると……それは暖い樣な暗い晩で、何處かで小川のさら〳〵鳴る音が聞えて、溶け掛つた雪と彈力のある春風が匂つて來るのです……もうそれから何年たつたか分らない程ですが、僕は夜溶

け掛つた雪の匂ひを嗅ぐと、堪らない程甘く懷しい哀愁に、心臟が縮まる樣な心持がします……もう一度會つて抱きしめてやつて、一緒に暗い町を歩いて見度くなるのです……そして泣き度い樣な祈り度い樣な、過ぎ去つた遠い幸福に對して人生に感謝し度い樣な氣がするのです！」

ミハイロフは醫師に見えない何物かを、自分の目の前に見て居る樣な風付で、大きく目を見開きながら、無言の儘蠟燭の焰を見詰めるのであつた。

「それはそうだけれど」と醫師は言つた。「併しさうした悦びに對して、恐しい代價を拂はなきやなりますまいよ……」

「そりやあ」とミハイロフは言つた。「此の世では何んな事に對しても代價を拂はなきやなりませんさ。拂ふ丈の價値(ねうち)があれはまあ結構なんですよ！」

醫師は口を噤んでゐたが、又もや蒼白い顏をしたネルリを想ひ出した。

「實はね、今日いゝ人に會つたんですよ」思切りの惡い調子で彼はかう言出した。

「誰に？」とミハイロフは早口に訊ねた。と、何か一つの物に集中した様な執拗な表情が彼の顔を掠めた。

「あの君の、それ何とか云つたけ……ネルリですよ……」對手の顔を見ないで醫師のアノルヂイはかう言つて、間誤つついた様な風でジャムに手を延した。

ミハイロフはまるで對手の心の奥底まで徹しようとするかの様に、無言の儘醫師に視線を投げた。

「あの娘は一生を棒に振つたぢやありませんか……」と醫師は小さな聲で言足した。

ミハイロフは何物かと戰つてゐるかの様に、直ぐには返事をしなかつた。

「ねえ醫師！」殆ど毒々しい位な調子で彼は言ひ出した。「まあ一生を棒に振つたとしませう！併し一生を棒に振つたとは何の事でせう？我々二人は幸福だつたのです、それで結構ぢやありませんか。一體あの女が老嬢として何の悦びも想ひ出もなく萎びて了ふか、それとも何處かの……官吏と結婚して了へば宜かつた、とでも被仰るんです

か！本當に何んな貴重な物を失つたと云ふのでせう、考へて見ても下さい！……」

醫師のアルノルヂイは默つてゐた。彼は本當に此の美しい、女好きのする、熱情的な、面白いミハイロフの物となつた方が、他の誰に身を任せるよりも、女として氣が利いて居る様な氣がしたのである。

「それにこれは一體誰の罪でせう？」ミハイロフは奇妙にムキになつて再びかう言ひ出した。「僕は前にあの女を騙した譯ぢやありません。永久の戀なぞ約束しやしなかつたんですからね……あの女も自分が何う云ふ事をしようとしてるか、よく承知して居た筈なのです……」

「夢中になつたんですなあ」と醫師は用心深い調子で口を入れた。

「僕だつて夢中になつたんですよ！」とミハイロフは凄じい聲で叫んだ。「あれは僕の犠牲になつたのぢやなくて、社會組織全體の犠牲なんです……若し人生がもつと別な物であつたら、此事の中には悦び以外何物も無かつたに相違ないです……若し世間の

人が幸福になり度かつたら、勝手に別な秩序を作り上げるがいゝ。僕なぞに謹慎を要求する筋合は有りやしないのだ！……僕は合點が行かない、從つてそんな物を考量に入れようと思はないです」

「だつて君はあの女を棄てたぢやありませんか……」アルノルヂイは猶一層低い聲でかう注意した。

「僕は何も棄てやしません……僕は只生き度いのです！假令誰の爲めであらうとも、僕が自分自身を犧牲に供しなきやならないなんて、まるで理由が分らないぢやありませんか！……女は澤山あります。そして彼等は皆美しい。僕に取つて必要なのはすべての女で、一人切りぢやありません。而も僕は自分で自分を苦しめたり、自分を歪げたり、表面はかり裝つたり、他人を欺いたりする事は出來ないです！……あの女には何かしら永遠の愛とか云ふ物が必要なんですが、僕には生憎その持合せがない……それで別れた譯なんです！……實はね醫師、僕は今でも矢張あの女が好きです。だから

らあゝ云ふ不幸な身の上になつたのが、痛ましくて堪らないのです……僕は自分が嘗て共棲した女を決して忘れないで、一生涯優しい情愛を保存してゐますが、併し彼等の中の一人を幸福にする爲めに、自分の魂を亡ぼすのは堪え得られない事だし、又無意味な事です……又それが一體何の幸福でせう？……人間を無理に鎖で繋いで置くなんて、奇妙な話ぢやありませんか！人間は一生涯一番づゝに、自分で自分を束縛しようと骨折つてゐますが、その結果は醜惡以外に何物も有りません。未だ一嘗て一度も幸福な結婚も、永遠の愛も現れて來ない癖に、是が非でもみんなにかうした生活を送らせなければ承知しないんです！……一體皆何を望んでるんでせう。もし萬一偶然何處かに幸福が出て來はしないだらうかと、そんな事でも當にしてるんでせうかね？」

「併しこれに就ては嫉妬も非常な意味を有してゐますよ……」とアルノルヂイが言つた。

「嫉妬ですつて？」とミハイロフは考深さうに問返した。「さう……勿論……併し人間

の心理で恐しい力を持つてゐたのは奴隷根性ですが、それは既に征服されて了ひました！所が此嫉妬は奴隷根性よりもつと惡いです！これは系統的(システマチック)に人間を不具にしました、又これから先も不具にする事でせう……所がありとあらゆる奴隷根性の中で、尤も惡性な奴隷根性たる此嫉妬(それはつまり靈魂、肉體、感情、其他人間の有する一切の物の奴隷狀態を、同時に意味するからです……)に對して戰ひを宣する者は、殆ど惡黨扱ひにされないばかりの有樣です……いや、こんな事を話したつて仕方がありません！……僕は現在生活してる樣に生活し度いのです、又さうする積りです！」

醫師は首を傾れて、コップの中で匙をがちや〳〵と鳴らした。彼は何一つ論駁する事が出來なかつた。何故と言つて一切の駁論はもう疾うに知れ切つて、飽き〳〵して居たからである。何かしら一種漠然とした眞理が、ミハイロフの言葉の中に含まれてゐて、それを辯難する事は不可能であつた。彼の頭には只無限な苦痛の連續のみが映じて、あれ程明るい强烈な感情や、あれ程强く人間を驚摑みにする力を有つた歡樂が

只々苦痛のみに導いて行くかと思ふと、奇妙な感じがするのであつた。

ミハイロフは默つてゐた。彼の美しい顏を暗い激昂の影がたゆたふのであつた。

醫師のアルノルディはそつと彼を儉み見た。

「ぢや宜しい」と彼は言つた。「それはまあ假りにさうとして置いても、併し君の歡樂は永久に他人の苦しみに依つて毒される譯ですな……」

「あなたは僕がそれを知らないと思つてるんですか？」とミハイロフは奇妙な調子でかう訊ねた。苦痛の痙攣が明らかに彼の唇を歪めた。

「え、……」とアルノルディは呟いた。「だつて人生はもつと他の事で充す事も出來るぢやありませんか？」

「何です？」

「爲る事は幾らでも有りますよ……現に君などは藝術を持つて居られるから……」

ミハイロフは苦笑を洩らした。

「人生と云ふものはねえ醫師、乞度何をしても苦痛しか無い様に出來てるんでせうよ！」

彼の顔は束の間にさつと變つた。そして目の光は消えて了つて、その中に哀愁と苦痛の表情が閃めいた。

「醫師、あなたは藝術とは何う云ふものか御存知ですか？御存知ない？……所が僕にはよく分つて居ます！藝術は要するに不斷の苦しみに過ぎないです……僕は堂々たる大家の口から極々有觸れた職人か腰辨にでも成り度いと云ふ言葉を、何遍聞いたか分らない位です……それは勿論意氣沮喪した時の事ですが、併し俗惡卑賤な事物をまるで最上の幸福の如く空想する様になる爲めには、何れ位苦しい經驗を嘗めなければならないか、到底想像する事も出來ない位です！あなたそれが分りますか？」

「分ります」と醫師のアルノルヂイは首を振つた。

「實際藝術家となる爲めには狂人にならなけりやなりません」とミハイロフは語を次

いだ。彼の暗色をした目には偏執狂の様な閃めきが燃えた。「何故と云つて永久にさう云ふ緊張の中に生活し乍ら、實際の所よくも分らない奇怪な理想の爲めに、自分の腦髓の血を最後の一滴まで吸ひ盡す様な事は、狂人でなければ到底出來る事ぢやありません。あゝそれは何と云ふ恐しい事だらう！……畫家が仕事をする時には、まるでと、ろ火の上に掛けられて燒けてゐる様なものです。何んな物を描いても自分の目には忌な物に映つて、自分で自分の仕事が恥しいのです。そして其詰らない弱々しい仕事を誰かに見られはしないかと、恐しくつて堪らないと云ふ有様なのです。やがて次第に何うして俺はこんなに詰らない、平凡な人間に生れたのだらうと、自分で自分を輕蔑する様になります。他の者には出來る事が何故自分に出來ないのだらう、と思ふと時々泣き度くなつて來ますよ。而も何より恐しいのは、自分が立派な作品を拵へたと云ふことを、何うしても眞底から眞面目に信じられないと言ふ事なのです。何かしら妙な分裂した心の狀態に陷つて了つて、人から褒められればほんのお世辭に過ぎない様

な氣がするし、罵倒されるとその人間は自分の敵で、自分の藝術が分らないのか、又はそれとも自分を傷つける爲めに、わざと分らない樣な風をして居るのだ、と云つた樣に思はれて仕方がないのです。此の狀態が棺の中へ入るまで絶えず續くのですからねえ……若し才能が盡きる迄生き延びたら、それこそ猶一層恐しいです！又さう云ふ例は幾らでも我々の眼前にありますよ！……で結局かう云ふ苦しみをして何になるのか、と訊き度くなつて來るのです」

醫師のアルノルヂイは何か言返さうとしたが、間に合はなかつた。

「僕はあなたの言はうと思つて居られる事が、みんな前から分つてゐます」とシミハイロフは遮つた。顔は燃える樣な色をして、目は前後を忘れる程興奮して居た。「藝術の讃美とか何とか云ふ事に就いて、發し得る言葉は悉く諂んじてゐます……がそれは要するに譫語か何ぞの樣なものに過ぎません！ヒステリイ患者の自惚れと云ひ度いが、それよりもつと惡い事かも知れません。現に僕はあの『白鳥の湖』の繪に九二月費

りましたが……あれは本當に何と云ふ湖でせう？何故ですつて？まあそれは今問題にしない事にしませう……外ぢやありません、やつとの事で白い生けるが如き白鳥が、いや生きた物よりもつと美しい白鳥が、暗い水の上に影を映してゐる姿が、僕の目の前に現れたとき……あなた分りますか？……何とも言へない程氣高くて、純潔で、冷やかな白鳥が、暗く冷い淵の上に浮んでゐるのです……その時僕は歡喜の餘り殆ど發狂しないばかりでした！僕はいきなり往來へ駈け出して、自分の作つた物がどえらい物だといふ事を、みんなに吹聽し度くなりました……若し僕があんな白鳥を現實に見たならば、僕は岸に膝をついて兩手を組合せ、感激と誇りの念に泣き出したに相違ありません。所が繪が仕上つてから見ると、僕は情ない樣な痛ましい樣な氣がして來ましたよ、醫師！」

「何故です？」と醫師は怪訝さうに訊ねた。

「知りません……說明が出來ないのです……其處に何か在るんですね……それは實

に奇妙な心持なんです……さうですね、若し生血のしたたる心臓を一片千切つて、それを抛げ付けるとしたら何うでせう……僕は突然かう感じたのです―― 自分があれ丈苦心した畫と自分との間には、全然何物も存在しない！かう思ふと僕の歡喜も苦悶も、何かかう望みの無い空洞の中に、すつかり溶けて行つて了ひました。白鳥を描いた、それでお了ひだ……それつ切りだ……自分は自分で獨立した生活を營まねばならぬし、繪も亦自分で獨自の生活をする……で僕はかう云ふ事を空想して見ました。自分の描いた白鳥が何處かの大きな、冷い美術館の廣間へ懸けられるとする……右の方には『イゴーリ軍話』（露西亞の傳説を取扱ひたる畫題）と云つた様な物があるかと思ふと、又一方には『家畜飼ふ庭』とか、『岐路に立ちたる騎士』とか、『ヨアン皇帝』とか云ふ畫が、ずらつと一列に並んでゐる。所が自分は何處か遠い所に住んでゐて、同じ様な惱ましい緊張を以て、後から後からと死ぬ迄何か描き續けてゐる……若し僕が百枚目の畫を描きさして死んだとしても、十枚目の畫を描きさして死ぬのと何等の相違もないのです！……さうして美術館の中では依然として冷やかな、變化の無い光線が射し込んで、畫はむつつりと押し默つた儘で、見物は感動の餘り首を痛くし乍らぶら〳〵歩いてゐる……百年經つた後も僕の白鳥は、依然として暗い水に姿を映してゐるでせう……」

「さう、それが何うなのです……結構ぢやありませんか……」合點が行かないらしくアルノルヂイは訊ねた。

「あゝ！」とミハイロフは忌々しさうに叫んだ。「あなたは分らないんですね！……だつて白鳥は僕と云ふ物なしに生活するぢやありませんか！それは丁度何かしら必要なものが、僕と云ふ物を滲潤して通り抜けて行く様な工合です（併しそれは又或人に取つては不必要なものかも知れませんが）……所で僕はまるで塵塚の中に忘れられたぼろ布の様に、自分一人何の關りもなく取殘される譯です……分りますか、それは僕自身ぢやないのです、え……分りますか……いや僕には到底も言表はせないです！」

ミハイロフは飛び上つて、室の中を歩き廻り始めた。醫師アルノルヂイの背後に立

つてゐるのと同じ様な巨大な影が、天井の方まで折れ曲り乍ら彼の後ろに起つて、折れたり曲つたりし乍ら、隅から隅へと絶間なく隨いて廻つた。醫師もミハイロフもそれに氣が付かなかつた。

ミハイロフは長い間無言に歩いて居たが、新たに呼醒された惱ましい想念が、凄じい勢で彼の腦裡を荒れ狂ひ始めたのは、その顏付から察しられた。やがて彼は不意に立止つて、いつもの癖で頭を一振りすると、急に鋭い聲で高々と笑ひ出したので、醫師は思はず慄然とした。

「こんな事はみんなノンセンスですよ醫師！」

「ノンセンスですつて？」まるで反響の様に醫師は器械的にかう繰返した。

此瞬間ふと彼の頭に白い、冷かな美術館の廣間が浮んで來た。ずらりと並んだ畫、物々しい靜寂の冷氣、そして暗い神秘的な淵の上に永久に凍り付いた、まるで誰かの苦痛の紀念碑の様な白鳥！

「君は何と言つたんですか？」ふと彼は我に返つてかう問ひ返した。

「倶樂部へ出掛けようと言つてるんですよ」何となくわざとらしい快活な調子で、ミハイロフはかう言つた。

「倶樂部？」と醫師のアルノルヂイは繰返して溜息をついた。

「溜息なんか吐くのをお止しなさい醫師、お願ひですから！」とミハイロフは叫んで對手の肥えた兩肩を掴まへ乍ら、優しく責める様な手付で搖ぶつた。彼はもう以前通りの快活な暢氣らしい青年になつて、今のはまるで一寸深い暗の中から、永遠なる白鳥の死せるが如き、美しい冷やかな幻を呼出したのではないか、と思はれるやうであつた。

「ぢや出掛けよう」ぢつと彼の顏を見てから、醫師のアルノルヂイは同意して、重々しさうに體を擡げた。

ミハイロフは自分の白い帽子を取るし、醫師のアルノルヂイは肥つた肩に、何時も

お決りの帆布の背廣を着て、蠟燭を消した。室は一瞬間に暗闇の中へ沈んで、黒い影も聲の無い蛾も、まるで存在しなかつた物のやうに跡形もなく消えて了つた。二人は外へ出た。

偉大な星空は二人の上に擴つて、夜の空間から生ずる冷氣をさつと吹き付けた。頭の上は一面にきら〳〵と火花の樣に輝いて居た。銀河は凍つた霜の花のやうに煙り乍ら、到底想像も付かぬ程の高みへ遠のいて行く、蒼黒い空の圓天井に連つて居た。併し地上は何處も彼處も漆の樣な暗さで、ミハイロフは危く入口の階段から轉り落ちないばかりであつた。

「氣をお付けなさい、其處に段々がありますよ……」と醫師は遲ればせに注意した。

「あなたは序でに明日それを言つたら宜かつたのに！」ミハイロフは暗の中から愉快げにかう應へた。彼等が未だ玄關先を離れない中に、誰やら門前へ馬車を乘り付ける氣配がした。車輪の軋む音や、目に見えぬ馬の鼻を鳴らす音が聞えたと思ふと、白い

物の陰が耳門の所に現れた。

「アルノルヂイ醫師のお住居は此方ですか？」と云ふ若い女の聲がした。

「ちよつ、惡い鹽梅だなぁ！」とミハイロフは忌々しげに呟いた。彼は醫師と一緒でなければ、倶樂部へ行き度くなかつたのである。

「私がアルノルヂイです」と醫師は答へた。

白衣の婦人は二人の傍へ近寄つた。彼女は氣をせいてゐるらしく、其姿は水の上の霧の樣に、暗の中をふは〳〵と漂つて居た。

「先生失禮ですがお出でを願へませんか。私お迎へに上つたんでございますの！」暗闇の中で醫師の顏を見分けようと努め乍ら、彼女は早口にかう言つた。

「何の御用てすか？」落付拂つた調子で悠然と醫師は訊ねた。

「私お迎へに上つたんでございますの……」まるで醫師の胸に兩手を載せようとでもする樣な、奇妙な素振を示しながら若い女は繰返した。「父が大變惡いのでございます

……何だか知りませんが、どうやら發作が起つたらしいので……私自分でお迎へに參りましたの……何うか少しも早くお願ひします！」

醫師のアルノルヂイは背の高い肥つた體を屈めて、彼女の顏を覗き込み乍ら、その眞黑な目や、ふつくらした唇や、周章てて無造作にふはりと被つた白い頭巾を見透したのである。

「誰が發作を起したのですつて　」と彼は訊ねた。

「私はトレグーロワですの」此方は忙しさうに說明した。それは小柄な大學生のチージュが、出稽古をしてゐる子供等の姉に當る娘であつた。

けれど醫師のアルノルヂイはもうそれと氣が付いた。

「あゝエリザベータ・ペトローヴナ、あなたでしたか！ちやお宅のお父さんが惡いのですか　それは一體……前からですね？」

そして丁度折が惡いのも考へないで、醫師は例もの癖で咳をする樣な聲で、

「一寸御紹介さして頂きます……此方はミハイロフさんで……」

大きな目にふつくらした無邪氣な唇を持つた、見覺えのない可愛い顏が、搖れ動く暗の中で覺束ない星明りに透しながら、ミハイロフの顏を差し覗いた。娘は殆どその名を聞き分けようともしないで、直ぐにくるりと醫師の方へ振向いた。

「後生ですから、何うか少しも早く！」

「參りませう」重々しく吐息をつき乍ら醫師は同意した。

娘は醫師を曳立てて行く樣に、先に立つて歩き出した。彼女の足取りは輕快であつたが、肥大な醫師はまるで懲役人が、永久に離れる事の無い手車に、又しても鎖で繫がれたものの樣に、重々しく後から足を運んだ。

ミハイロフは無言の儘二人を門外へ送つて、逞ましい商人の家の飼馬が蹴上げた埃のじつと落付くのを待つてゐたが、やがて只一人暗い往來傳ひに歩き出した。

柔い女の手の感觸と、何の緣も無いインディファレントな目の、稻妻の樣に早い冷淡

な(と彼には思はれた)視線とは、何時も彼を否應なしに女の方へ引つ張つて行く、奇怪な燒け付く樣な好奇心を、彼の心に呼醒したのである。彼は暗い往來を歩き乍ら、眞黑な空に撒き散された輝かしい星を眺めてゐるうちに、ふと目の前の暗の中で、薄色の着物のぴたりと吸付いた圓い肩の朧げな輪廓や、白い顏に印せられた他所々々しい黑い目や、むつちりと高い胸や、見知らぬ娘のしなやかな、强健らしい、誘ふ樣な體全體が、ゆら〳〵と搖れ乍ら現れる樣な氣がした。

すると彼は自分が再び謎の前に立つて、解決し難い、醫す事の出來ない或物に誘引され始めたのが、殆ど胸の痛い程惱ましく感じられて來たのである。

九

倶樂部では何處もかもすつかり灯りがついて、まるで中に蠟燭を點した玩具の家の樣に明るかつた。樂しげな光りが幅の廣い帶をなして、開放した窓から暗い往來へ流れ出し乍ら、神秘めかしい圓屋根を星空に沒してゐる、陰鬱な敎會の足許を照してゐる。

倶樂部の控室は帽子や、杖や、傘などで一杯であつた。歌留多室からはもう青い煙草の烟が流れ出て、其處からどつと崩れる樣な大勢の笑ひ聲や、玉突の玉の乾いたかち〳〵云ふ音などが聞えて居た。

ミハイロフは自分の白い帽子を見ずに掛けて、胡麻鹽の兵隊鬚を生した年寄りの玄關番に訊ねた。

「誰々來てるかねスチェパン?」

「誰々と申しまして」馴々しげな慇懃な態度で杖を受取つて、それを片隅へ立掛けながら、玄關番は答へた。「隨分大勢見えて居られます……警察署長も來てお居でになりますし、將校方も……それからザハール●マクシームイチも……」

「アルブーゾフが?」とミハイロフは早口に問返して、一寸其瞬間閾の上に立止つた。

「左樣でございます。連の方とお出でになりましたので。クラウゼ少尉、トレーネフ

二等大尉、それから大學生方などで……中々大人數でございます」

ミハイロフはそれを聞流して、圖書室の方へ行つた。そこはひつそり閑としてゐて、ラムプの笠が深く下してある爲めに暗い樣な氣がした。只大卓に掛けた綠色の羅紗の上で、新聞や、本がけば〳〵しく白々と見えてゐた。大學生のチージュは片膝椅子の上へ載せ、兩肘を卓に突き乍ら、低く屈み込んで新聞を讀んでゐた。長老ども助祭ども付かぬ見知らぬ男が、安樂椅子の中へ深々と身を埋め、赤い豐かな髮を兩肩へ波打たせ乍ら、さも氣持よささうに繪入雜誌を見てゐた。

「やゝ今晩は！」とチージュは首を上げて聲を掛けた。「何うしました、薩張見えませんなゝ」

「仕事をして居たのです」氣の進まぬ樣子でミハイロフは答へた。彼はチージュが煙たかつた。それは此大學生が彼に對して、輕蔑したやうな、反抗的態度を取つてゐるのが感じられたからである。

赤毛の男は雜誌の端から、まじ〳〵とミハイロフを尻目に掛けた。チージュは指で新聞の端を弄りながら、此次に何と言つたものか分らない樣な風付であつた。ミハイロフは卓の上から本を取つて、一寸目次を見ると直ぐ元へ戻した。

「さう……」まるで敵の陣中に居る樣なばつの惡さを感じ乍ら、彼は何とも付かぬ調子で齒と齒の間からかう言つた。

チージュは默つてゐた。助祭は目も放さずに、雜誌の陰から眺め續けるのであつた。

ミハイロフは何うしていゝか分らなかつた。アルブーゾフと會ふのも辛いし、歸つて行くのも卑屈なやうに思はれた。さうすれば相手を恐れた事になつて了ふ。ミハイロフは哀しい樣な忌々しい樣な氣がした。彼はアルブーゾフと長い間一緒に勉强した仲なので、眞から暖い友情を感じてゐたが、今は敵同志として顏を合せなければならなくなつた。ミハイロフは罪惡觀念に惱まされた。尤も彼は決して罪惡など認めなかつたのだけれど……。

『結局これは當のネルリ自身の問題なのだ！』さるで痛みでも感じる樣に眉を顰めながら、彼はかう考へた。

明々と照らされた食堂の戸口を洩れて大勢の人の聲や、皿のかちや〳〵鳴る響や、破れる樣な男の笑聲などが聞えた。と誰やら其處から人が出て來て、食堂の光を隱したものがある。

背の餘り高くない、肩巾の廣い、黑い縮れ毛のくしや〳〵に縺れた、亂酒と不眠に黑い目を充血さした男が、圖書室の中へ入つて來たのである。

「あゝ……セルゲイ！」思ひ掛けなくミハイロフを見付けて、彼はしや嗄れた磊落な聲で叫んだ。

少しよろけ氣味ではあつたけれど、それでも漆塗りの靴をしつかりと大股に擴げ乍ら、彼は眞直にミハイロフの方へ歩み寄つた。此の漆塗りの靴や、釦を外した青い、袖無外套の下から覗いて居る赤い絹シャツや、それに黑い髮の毛などは、彼の容貌にさ

も應揚濶達らしい、而も無氣味な趣を添へてゐるのであつた。

ミハイロフは彼を迎へる樣に立上つたが、何となく奇妙な、警戒する樣な身構へをした。そして傍へ近寄つて來た男の粗野で豪放な樣子に比べると、彼の姿はすらりとして優美に見えた。

「見忘れたのかね？」挑戰と冷笑と憂愁の籠つた、奇怪な調子で對手はかう言つた。

「それとも僕が恐いのかい？」

チージュは頭を上げた。赤毛の僧も膝の上へ雜誌を下して、一生懸命に目を睜り乍ら二人を注視し始めた。町ぢうの人が此の顏合せの裏面の消息を知つてゐた——アルブーゾフが酒の醉に乘じてではあるけれど、死ぬ程戀ひ焦れてゐた娘を、ミハイロフが誘惑して擧句の果に棄てた顚末を、悉しく知つてゐたのである。

「馬鹿な事を言ふなよ」美しい誇（プライド）に充ちた頭を高く振上げながら、ミハイロフは輕蔑した樣な冷い調子でかう答へた。

アルブーゾフは袖無外套の衣嚢(ポケット)に兩手を突込んで、一寸一瞬間立止りながら、燒け付く樣な熱した目で額越しにミハイロフを見詰めた。一秒間、いやそれよりもつと短いかも知れない――息の窒る樣な緊張した沈默が續いた。アルブーゾフは巾の廣い胸で重々しく息をし乍ら、丁度牡牛が突擊に懸る前に土を堀る樣に、額の廣い重さうな頭を段々低く下げて行くのであつた。黑い髮が一握りだらりと垂れた。

ミハイロフは依然として卓に手を突きながら立つた儘、じつと待受けてゐた。彼は落付き拂つて、輕蔑した樣な冷い微笑さへ浮べてゐるのであつた。併し細い白い手は卓の上で微かに慄へてゐた。

何かしら物凄いもの――丁度醜い馬鹿げた殺人の豫感の樣なものが、空中に垂れ被さつて來た。白い手は段々强く慄へ、アルブーゾフの息使ひは愈々しや嗄れて重々しくなつた。

チージュは自分でもそれと氣が付かないで、何時しか卓の傍を離れた。赤毛の僧は何

やら言はうとしたが、只蒼くなつた唇を動かしたのみで、突然椅子から飛び上つた。併し此瞬間アルブーゾフは縺れた長髮を一振りして、黑い鬚の蔭から白い巾廣の齒を見せ乍ら、ひん曲つた樣な薄笑を浮べると、强ひて愉快さうな引き千切つた樣な聲で言出した。

「いや、まあいゝさ……御機嫌よう、隨分長く會はなかつたぢやないか！」

ミハイロフは靜かに慄へる手を差出した。けれどアルブーゾフは彼の方へ一歩踏み出して、まるで何物にも代へる事の出來ない親友か何ぞの樣に、固く對手を抱きしめた。二人は接吻し合つた。そして赤毛の僧とチージュが二人の顏を見た時には、ミハイロフはまるで貶しめられた者の樣に、蒼白い當惑したやうな顏付をしてゐるし、陰鬱な美しさを持つたアルブーゾフの顏には、重苦しい病的な憂愁と云つた樣な、奇妙な表情が浮んでゐた。

「所で何うだらう……一緒に行つて飲まうぢやないか？ え？……」しつかりとミハイ

ロフの手を取り乍ら、アルブーゾフは不自然に暢氣さうな調子でかう言つた。「彼方にゐるのはみんな仲間の連中ばかりだ……盛んに飯つてるよ、セリョージャ(セイゲルの愛稱)！……巴里へも行つて來たが……盛んに飲つてるよ！……飲まうぢやないかい、え？……我黨の沈沒しなかつた所は嘗て無いよ！……だが君は何處へ行つてたね？」

「行かう」ミハイロフは目を上げないで小さな聲で答へた。「莫斯科に居た、繪を持つて行つたのさ……それから自分の持村に引込んで仕事をしてたよ……所で君は何う云ふ風に暮してるい？」

アルブーゾフの充血した陰鬱な目は、奇妙な愛情を帶びて、ミハイロフの話してゐる間ぢう、じつと彼を見詰めてゐた。ミハイロフが口を噤んだとき、彼は鐵の樣な指を以て猶一層強く對手の肘を握りしめた。

「君はいゝ男だよセリョージャ！……繪を持つて行つたつて言ふ事だが、何うして僕に見せて呉れなかつたのだね？僕は君の繪が好きなんだよ……若しかしたら買つたかも

知れないのに……それとも僕には分らないかな、え……全く僕は舊態依然たりだ。飲む、荒れる……それ丈なのだ！僕等のやうな商人の息子にはそれが相當してるのさ……ぢや行かう！」

よく騎兵に見受けられる樣な少し曲つた、强健な、漆塗りの靴をはいた足で、例の如くしつかりと大股に歩きながら、彼はミハイロフを引つ張つて食堂へ行つた。

ほつと息をついたチージュは、馬鹿にした樣な目付で二人を見送つた。赤毛の僧は二人が戸の陰へ隱れるのを待つて、にや〳〵笑ひ乍らチージュに話し掛けた。

「私は實の所吃驚しましたよ……屹度横面でもぶん撲るに相違ないと思つてね！あなた知つてゐますか、あの繪描きがアルブーゾフの女を横取りしたんですよ……所で今その女は只ならぬ體なんですが、先生それを棄てゝ了つたんですよ……何しろ大した騷ぎで、町ぢうの者が其噂をしてゐますよ」

「あなたは」やつと薄い唇を動かし乍ら、チージュは徐かに毒々しく注意した。「なる

べく世間の蔭口など取次ぎしない方がいゝでせう……僧職に居られる方には何うも不似合の様ですよ、全く！」

赤毛の僧は何處までも人の好ささうな聲でひひひと笑つた。

「何が蔭口ですか？正眞正銘の事實ですよ……みんな誰でも知つてますよ。所でキリールさん、あなたのお口の惡いと云ふ事も、矢張り疾うから承知して居りますで……始終皮肉ばかり言つておいでゝすからな！」

チージュは新聞を棄てゝ、馬鹿にした様に彼を見遣つた。

「ニコライ長老、あなたの人好しにも飽きく〳〵しましたよ……あなたには眞面目で腹を立てる譯にも行かない……滑稽な人物ですなあ！」

赤毛の僧はもう大聲上げて笑ひ出した。

チージュはぺつと唾を吐いて、椅子から片足下し、食堂の方へ行つて了つた。

此處では一切の物がけば〳〵しく騷々しかつた。棚は幾百と知れぬ色樣々な壜で輝

き、あちこちと飛び交ふボーイ達は邊りの光景に、陽氣な忙しさと云つた樣な氣分を添へて居た。

ある一つの卓を圍んで一組の客が陣取つてゐた。それは將校連の外に、隨分酷く酩酊してゐるらしい、眼鏡や頬鬚の馬鹿に目立つ人達であつた。彼等は譯の分らない響のいゝ聲で、互に負けず劣らず叫んでは、雷の樣な笑ひ聲を立てゝゐたが、その中で美事な鼻鬚を生した、肥つて大きな警察署長の堂々たる聲が、特別耳立つて聞えるのであつた。ミハイロフは其仲間で見知り越しの副官に氣が付いた。彼は白い肩章を掛けて、細面の傲慢らしい顔付をしてゐたが、低いけれど自信に充ちた聲で何やら話をしてゐた。そして人々がから〳〵と笑崩れる樣な時でも、腮の突出た美しい彼の顔はたゞ冷い薄笑ひに心持歪む丈であつた。

一面に皿や壜を並べた大卓では、アルブーゾフの組が食事をしてゐた。

「さあ諸君、鷹(美丈夫を意味す)を捕まへて來たよ！」しつかりと掴んだミハイロフ

の肘を依然として放さないで、アルブーゾフは思切つて磊落な調子でかう叫んだ。「實に愛すべき男なんだ。酒も中々行けるし、其上加之豪い書家んだからね……さうぢやないかセリョージャ、僕の言ふ事に間違あるまい？……みんなは知合かね？」

ミハイロフは取られた手を引放して、挨拶に行つた。彼は少しも早くアルブーゾフの傍が離れ度かつたのである。彼の暢氣さうな笑聲の中には、取つて付けた様な愉快らしい調子を透して、引千切つた様な病的な響が明かに聞取れるのであつた。

ミハイロフを迎へるべく立上つた人々は、人を馬鹿にした様な、メフィストフェレスめいた顔付のクラウゼ少尉と、蒼い顔をした、鬚の立派なトレーネフ二等大尉と、何處かの商人の息子と、頭の毛の蓬々とした、目付の野性でアブノーマルな、見覺えのない陰氣くさい男であつた。

「ナウーモフ」とアルブーゾフは此男を紹介した。「新しく來た家の技師だ……さあ座り給へ、セリョージャ、飲まうぢやないか！」

ミハイロフはクラウゼ少尉とナウーモフの間に座つた。

「所であの勉强家達は何處へ行つたんだい？まさか逃げ出したのぢやあるまい？」

不自然に活氣を帶びた調子で、アルブーゾフは氣を揉み出した。

「あの人達は玉突をやりに行きました」正確で慇懃な調子でクラウゼ少尉は答へた。

「又？ちよつ、勝手にさして置け！……飲み給へセリョージャ！」アルブーゾフは杯へ火酒を注ぐ拍子に、卓布の上へ溢しながらかう怒鳴つた。「邪魔になるかね、此方へ寄越し給へ」ミハイロフが杯や皿の間へ亂暴に抛り出された鞭を、肘で傍へ退けてゐるのに氣が付いて、彼はかう言つた。

彼は鞭を取つて椅子の上へ投げた。

「所で僕等は今夜新しい三頭立を祝つて飲んでるんだよセリョージャ」依然として熱病やみの様な調子で、アルブーゾフは語り續けた。彼は絶えず何物かにぐん〳〵しやくられて居る様な風であつた。「僕は今度素張らしいごえらい馬を買つたんだ。工場から

此處まで二時間で駈け付けたよ！」

「新しい三頭立を買つたつて？」ミハイロフはわざとらしい調子で訊ねた。「そして元の分は何うしたの？」

「元の分？」物思はしげにアルブーゾフは間返した。「殺しちやつた！」陰欝な剛い調子でかう言終ると、彼は一寸口を噤んだ。

「ではあなたの言はれるのは」クラウゼ少尉は細面の白い顔の上に、メフイストの樣な細い眉を吊り上げ乍ら、ナウーモフに向つて丁寧な低い聲でかう言ひ出した。

「私が言ふのはかうです」ミハイロフが思はず振向いて見た程鋭い聲で、思掛けなくナウーモフは對手を遮つた。「人間は自分の思想を不合理になるまで、押つめる事が出來ます……それは惨忍になる迄と言はうと、暴虐になる迄と言はうと、何うでも御隨意です……權利などと云ふ事は問題にもならない位です？……一體權利とは何です？權利は何物か或は何人かに對する打算を豫想してゐますが……一體何人に對する打算

でせう？何の爲めでせう？私は欲する事が出來ますね？若し欲する事が出來るとすれば、從つて私はその欲求を實行する事が出來ます……若し私に取つて生が忌しければ、私は自分自身の物であらうと、他の生存物のものであらうと、其生を撲滅すべき絶對の權利を持つてゐます。だつて私は一體誰に責任が有るのでせう？他の人間にですか？併し彼等は私を殺す事は出來るけれど、それはそれとして、私が自分の欲求を實行しようとするのを、禁じる譯には行きません！……人が自殺を考へてゐる時に、その權利が有るだらうか何うだらう、などと詮義立をするのは、たゞ滑稽でみじめな許りです！……力有るものをして行はしめよ——これがあらゆる教訓の中で唯一の眞理です！」

「全くだ！」とアルブーゾフが熱くなつて叫んだ。「權利も何もあつたものか！……亡くなつた僕の親爺は此地方一圓を貸地契約で搾り上げたし、僕は又あの工場で、ぐうの音も出ない程壓へ付けてやつてる！何方だつて同じことなんだ！まあ腕のある者は

僕と競爭するがいゝ！……權利も人道もあつたものか！人間は吸血鬼だつたのだから、これから先も矢張吸血鬼で通すのさ。全くその通りだ。自分が惡魔に喉を絞められない中にうんと他人をやつ付けて、魂まで剝ぎ取つて了ふんだ！よく人は金は棺の中へ持つて入れないと云ふが、ちやあ人道は持つて入れるのか？愛は持つて入れるのか？……さあ飲らないかセリョージャ！何うして飲まないのだ！」と彼は粗野な聲で怒鳴つた。「一寸待つて呉れ、僕は君と一緒に乾すぜ。さあ一つ杯をかちりと合さうぢやないか！」

ミハイロフは自分の盃をさし伸べた。アルブーゾフは充血した黑い目でじいつと彼を見詰めてゐたが、又もや優しい愛情と憂愁の影がその目を曇らせた。

「僕は君が好きだセリョージャ。今も好きだしこれから先も永久に好きでゐるだらう……萬一君を殺す樣な事があつても、それでも矢張り愛するに相違ない……さあ飲み給へ！」

むつとする樣な亂醉の氣が卓の上に漂つて居た。ひよろ長いクラウゼは死の樣に蒼い顏をして居たが、例の斜に吊上つたメフイストの樣な眉が、その尖つた顏面に奇妙に黑々と浮いて見えた。無口なトレーネフ二等大尉は、言葉もなく首を俛れて長い鼻髭を抓り乍ら、立て續けに杯を重ねて居た。ナウーモフは偏執狂の樣に緊張した、ワイルドな目付で邊りを見廻し乍ら、只濃い茶ばかり飲んでゐた。圖書室から現れたチージュは卓の端へ座を占めて、自分の前に小さな三鞭酒の杯を置き乍ら、耳へ入る邊りの會話に、侮蔑した樣な薄笑ひを洩すのであつた。彼は醉漢の中に交つてゐるのが退屈だつたけれど、此處を去つて了ふのも氣が進まなかつた。かうした光と喧燥の境を出て、薄暗いラムプと皺くたの寢臺のみが待受けてゐる、がらんとした小さな自分の室へ歸るのは餘りにも堪え難い事であつた。アルブーゾフは目立たぬ樣に飲んでゐたが、誰よりも一番に大きな聲をして怒鳴るのであつた。見受けた所彼は非常に醉つてゐるらしく、黑い目は段々陰鬱になつて、頰の上には白い斑點が浮いて來た。